「辰雄日誌１９２７」No.14

──１９２７年１月１日～１９２７年４月３０日──

小池辰雄

# １９２７年（昭和２年）〔２３歳〕

１９２７年１月１日（土）

晴。起床７時半。お雑煮を祝う。昨夕は本当に太陽の沈み行くを送った。有難うと云った。それでは明朝、輝きを以てまた、と約した。今朝あったときは彼はかなり東にのぼっていた。午前は詩篇とイザヤ書６０章とお祈りで半分すぎた。ミルトンをやった。午後３時頃から６時半まで、山本の小さい三人のために全く何も出来なかった。遊んだ。子供心に帰って。マリナゲもした。オバケゴッコもした。賑やかであった。お正月らしい半日をおくった。ただしこれは全く自分の昔にかえった心での意。彼等が帰るとひっそりして、二階に上った。静かに祈る。明日、聖旨ならばと。安息日をまつ。今日は勉強すべく。これからまたがんばるつもり。時まさに１０時。１２時まで。

１９２７年１月２日（日）

全く忙しい。日記も簡単ならざるを得ず。今日は１９２７年第一の聖日である。午後９時に西荻窪駅を発す。新町についたのは１０時すこしすぎ。佐藤勲君を訪う。伊藤さんに林檎７個とクリマン５０銭もって行く。おば様に叱られる。佐藤君と例の地図A.Smithの『聖地』をもって藤井先生へ行く。先生に地図をあげる。

先生、「何だ」と言われる。こまった。

佐藤君曰く、「小池さんにさがしていただいて、これをあげようと思いました」。

先生、「どうして！　君達二人でつかったらいいだろう」と。

佐藤、「二人でつかうよりも先生につかっていただきたくて」。それは二人の心であった。さらに二人の心は感謝の意にあったこと勿論であるが、ミルトンのお礼など云えば、早速先生に叱られるからそんなことは云わない。僕は終始だまって彼に一任した。

先生、「それでは、御好意いただきましょう」でやっと安心した。

散歩に行く。その記憶は永久的である。書かんとせず。

あのの如き犬、あの枯草の中。二人の祈り！　ミルトン研究、ミカンとバナナとお豆。細流！　写真！　野中さんの姿！　ミカンの残り一つ。二人の会話、柏木の講演！　藤井先生、ミルトン。４巻のアダム・イブの会話。カステラとsavoury pulp。夜の星、オリオン。晩の御馳走、トランプ、カルタ、順子さん。野中さんと帰る。省電の車中、帰途、お風呂、就床１２時！

「ああ神よしかの渓水をしたひ喘ぐがごとく わが霊魂もなんぢをしたひあへぐなり」(詩篇42･1)〔独文〕

１９２７年１月３日（月）

晴。８時半おきる。午前はバイブルと書翰、佐藤君へ。“Friendship”〔「友情」〕から多く引用したため、切手２枚となる。しかしこれはつらかった。本当に書かなければよかったとさえ思った。けれども佐藤君だから大丈夫とも思った。出した。８円の地図、４円ずつと思っていたところ、不図見ると彼は４円５０銭僕にくれている。これは大変。いけない。５０銭この次の聖日にかえさねばならぬ。

今晩から９時にとにもかくにもお祈りをするととした。ほかのお祈りは別として。彼佐藤と共に。どうか、Treue〔忠実〕を終りまでと切にねがう、自分のために。彼はおそらくまもるだろう。否、かく信ず。自分が９時を忘れはしないかが心配だ。全く自分の側のTreueがくずれざらんためにお願いする。

三弦さんが隆ちゃんをつれて２時頃来らる。３時に帰らる。僕はあんまりお気の毒だったから──皆がるすで──新宿まで二人をおくった。Love men!〔人々を愛せよ！〕であった。有難かった。直ちにひきかえす。もう今日はこれでやめる。あとは勉強とバイブル。

１９２７年１月４日（火）

晴。

「えらい兄さんをもったもんです」

との藤井先生のお言葉は今日、兄の日記Ⅳ、Graceful Winter (Ⅱ)〔優美な冬〕をよんで、

しみじみ有難うございます、神様、神様。である。涙なきを得ません。本当に「深く深く心」を教えられました。有難うございます。僕は何を言おう。

神様、神様、こんな兄さんをいただいたことを、何と感謝してよいか知りません。

有難うございます、有難うございます。アーメン。

何ト僕は駄目なんでしょう。駄目なんだと云うことさえおそろしくあります。

どうか、お心のままにお導き下さい。従わせて下さい。アーメン。

今日は平口さんが来られた。今月の『旧約と新約』をおかしした。

僕はもう独乙文学でいいんだ。哲学にうつりたいとも思ったが、どこでもいいんだ。しっかり歩むんだ。しっかり上をあおぐんだ。しっかりみまつんだ。しっかり人を愛すんだ。その外に僕はなくてありたい。

僕は何になるかしらない。が、とにかく一事は明らかだ。人になりたいんだ。それだけである。神の人になりたいのだ。それだけだ。

大きい兄さんは高島のおば様（まま様）と離して考えることが出来ない。まま様は政美だ。政美はまま様だと云ってよいのだ。二人にして実は一人。母と子の関係より深い。夫妻の関係と見てはわるい。言わく言い難き関係であって、その間一点の影なきこと、pure〔純粋〕のpureなることは天のお父様がよく御存じである。僕はこのお二人に終生treu〔忠実〕であらねば生きて行けぬ。

ああ、友情、それは貴い力である。が、僕は佐藤君との友情においていささかも故意なところがあってはならない。どうかお父様、導かるるまま、時をまって歩ませて下さい。僕にはまだ不自然がございます。されど安心だ！　Friendship〔友情〕は天のお父様にのみよってなるからである。その外にFriendshipはないのだから安心だ。お父様が手と手をつながせて下さるときに何の不安も不平もない。人の目や口には何と見ようと言うともかまわない。

天のお二人は不思議にも、いな、御恩寵の如く、僕の妻（Spiritual〔霊的な〕の）である。さればこそ、僕の本巻の標語は益々かたくせられた。ח א ת ש א〔我が兄は我が妻なり〕ן מ א〔アーメン〕である。

辰雄はいつ死んでもよい。

　そのときに言うだろう、

辰雄は何もしなかった。

　否、何も出来なかった。

辰雄は罪のかたまりだった。

…………

　辰雄は恩寵で！

辰雄は今晩は下に行って寝ることさえ

　いやになった。

机上の政美兄上がしっかり僕を

　見つめていらっしゃる。

つかまえられた。下に行けない。

偶像か？　何かしらぬ。

気狂か？　何かしらぬ。

辰雄の今はかかる状態である。

そして辰雄はこれが偶像でもなく、

気が狂っているのでもないことを

たしかにたしかに気づいている。

されば何だ。それは無限の深き祈りである。

泰ちゃんよ！　御身は今病床に難治の病に居られる。

青木の家の人々の心配と煩悶は大であろう。

けれども、

神様、もし泰ちゃんが救われんがために、

心身ともに今救われんがために、

若し、僕の血が必要ならば、

　　今！　只今！　おめし下さい。

僕は誰にも何にも言いません。アーメン。

お父様！　みもとに！　のみ！　アーメン。

「斯くのごとく御靈も我らの弱を助けたまふ。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御靈みづから言ひ難き歎をもて執成し給ふ。」（ロマ8･26）〔英語〕

アーメン！　お二人よ、天でお祈り下さいまして有難うございました。

１９２７年１月５日（水）

晴。おそろしき人哉。あれほどシャーシャーして居られるものかしら。煙草の煙をスパスパさせて。親友として彼を信じた兄上は二階に居られる。“Friendship”〔「友情」〕を贈りてブランクペイジに聖書の一句を掲げておくりし人は下に居る。私は彼が社交的な人間にすっかり堕しているのを見た。「政美さん」と口にだす彼の舌のいかに毒々しきことよ。もはや政美兄上は汝の如き人より、小池さんだの政美さんだの一言も云われたくないと僕の胸の中で答えた。ああ、僕の胸は一杯である。僕の胸は涙で一杯である。にくむにはあまりに事が深刻でなんとも息がつまりそうだった。僕はたまらなくなってその場を辞した。二階に来た。もう涙は一杯であった。彼は下で母と話を続けているだろう。死者にtreu〔忠実〕であるのが、真の友である証拠でないか。友逝きてあとはバケの皮！　それはくさった女よりあわれむべき人間ではないか。

兄はどれほど汝のために祈り、尽くしたか、汝の結婚の際どれほど兄は板ばさみとなって苦しかったか。クリスチャンとして最もとるべき道をとった兄に対して何と今思っているのか。かくの如きことを云いて兄の功に対して汝を責めんとするのでは決してない。兄は僕をしてかかることを一言も云わせないに違いない。

けれども、天のお父様はよく知っていらっしゃる。ああ、呪わしき人よ、汝再び帰ること能わざるに似たり。サタンよ！け！である。もはや汝と何のかかわりあらんやである。汝は地獄の子、我等は父の子なり。けれどもけれども、この事を眼前に見せつけられたる僕はただ怒りにもえて居られようか。僕の涙をどうしてくれるか。兄上よ！　いかなる人々が兄上にuntreu〔不忠実〕に走り行き、兄上を悪く云い思わんと。兄上はかつて日記に言い給いし如く、「彼によって勝ち得てあまりあり」であります。兄上よ！　どうかどんなことがあっても僕だけは終りまでtrue〔忠実〕にしたがう様に天で祈って下さい。僕のための兄上の血だったのでしょう。

兄上よ、これでどうか満足して下さい。天に向かって高らかに讃美の声をあげて下さい。終りまで兄と共に祈り、共に苦しむ様に祈って下さい。僕には家庭が与えられなくてもいいんです、兄上さえ居れば。そしてそこには高島のおば様が一緒に居て下さいます。

あざむかれたる人よ、

苦しみし人よ、

十字架を負いし人よ、

黙々として彼に従いて歩みし人よ、

涙を流して種子を蒔きし人よ、

寂寞にもただ父にすがりて歓喜せし人よ、

讃美して歩みし人よ、

humble〔謙虚〕なりし人よ、

pure〔純粋〕なりし人よ、

お父様どうか天でお二人をお抱き下さい。

私も聖国にお二人のあとを歩いていきとうございます。アーメン。

独り、ただお父様のみ。

　　ああ、人生とはこんなものであるか。

　　人とはそんなになさけないものか。

ああ、得がたきは友、どうか佐藤君、

同じさびしみを感ぜられる君よ、

　　ただお父様にたよりて行きましょうね。

その外何も考えるのをよそうね。

二人のTreue〔忠実、誠実〕は世界無比のものであると云うことは

お父様のみがおっしゃることばで、僕達はそれさえ、

誓ったり、思ったりしてもいけないのだ。

佐藤君と午後９時にお祈りする約束をした。今日は庭へ出て星の下でした。おちついた恵まれたお祈りであった。人生のよき伴侶とて信仰の友、主にある親しき友の如きはない。勿論、愛する妻は言わずもがな、更にお父様、エス様は言わずもがな。お父様と一緒に居ないで何が人生であるか。

芸術家をしていくらでも指をささしめよ。彼等はすでに報いを得たりである。

文学士となるか！　おお、最も文学者らしからざる文学者となりたい。内村先生の最もきらわれる職業に唯一の星があることをお父様は御存じでいらっしゃる。その人こそ僕であらねばならぬ。

１９２７年１月６日（木）

何をしたかおぼえなし。ただ寝坊と夜更かしを知っている。けれども、なまけたわけではなかった。

１９２７年１月７日（金）

雨。雪で寒い。兄の日記をよんで深き深き心を戴く。兄はいつまでも僕と一緒に生きている。彼は「我が妻、骨の骨、肉の肉」である。“My half”〔わが半身〕である。ミルトンに教えられること多き毎日曜日を感謝する。

朝から晩まで新町である。聖日はたしかに沃地である。

母上に毎夜、聖書をお読みしている。せざるを得ぬ。

君代さん、嘉代子さんに連名宛の手紙を書いたのは木曜だった。本当に高島さんのおば様と政美兄上との故に、このお二人は僕にとって女の友である。けれども、交際をしない。ただ霊の上で、祈りの上でお交際をねがう。お二人は人妻で居られる。一人は内田、一人は桑原と申される。そのお二人の主人公なる方々は僕少しも知らぬ。知らんとせず。ただ彼女等と霊の交あらば可。それをねがうのみ。しっかりお歩きになって下さいと祈った。祈る。本当に御両親をなくされた女のお二人を思うと涙である。まだ女のお子様が居られる。その方（静枝さん）は更にかわいそうだ。どうかしっかりした信仰へと。

日記をつけてから１３冊、４０００頁にあまる。驚く。積みて積みあげよ。そはカミの山のみ！と一面には云えるだろう、一面にはこの日記、勿論神様のみが御覧下さらば足れりで、神様が見て下さるときに、辰雄はただ恩寵によりてかく歩ませていただきましたと、み前に善も悪も、清も汚もさらけ出すまでである。そしてこれは書くことそのことに於て神様がよしと見給うことであって、その外に何の目的もない。神がせと云われるので記すまでである。ペンの手より落ちるまで、これがいかなる煙と化しましょうとも、歩みの跡を忠実に記さしめ給え。聖名をペンの上にも讃えしめ給え。

彼故にすべては空にあらざるを知ればなり。アーメン。（８日夜記）

１９２７年１月８日（土）

晴。春の如く暖かかりし一日。ミルトンを読む。ヘブライ語をやる。ドイツ語をやる。寝んと思う。楽しき聖日を待つ。天の兄が慕われる。

佐藤勲君が僕をMy half〔わが半身〕とよんでくれる。かくまで思ってくれる友を有難しと思う。終りにまたYour half〔汝の半身〕としてある。然り！と僕も答える。午後９時のお祈りに彼は反対であった。よくわかった。然り！と僕はすなおに答える。けれども僕にとって午後の９時は忘れられぬとき。

政美兄上が親友２、３と共に約して毎夜毎夜祈りせしときなれば、彼の雨戸を排する音は未だ耳にある。空に向かって彼は眼をあげた、頭をたれた、祈った。中学時代の僕にそれはたしかに異様なものであって、その印象たるや深く深くある。親友がはたしてどれほど守りたるや僕は知らぬ。けれども兄はやった、祈った、祈った。僕はそれが外形的でないことを知る。少なくとも兄においては。それ故に僕は９時を憶える。独りで祈らん。兄、政美、天の彼と共に、９時を憶えて。天と地で祈る。

佐藤君は祈られぬともよろしい。君は寝がけに祈ってくれたまえ。僕も寝がけに祈る、再び。９時は９時で僕独りで祈って行こう。さらば。さらば９時よ、汝は聖なる秘なる時である。天の兄の声はとくに９時にともに祈ってくれるなれば、僕これを忘れ能わぬ。この歴史を知らざる佐藤君、この背景のなき佐藤君にこれをのぞんだ僕がわるかった。ゆるし給え。

１９２７年１月９日（日）

藤井先生。新町行である。朝、政矣さんと渋谷で落ち合う約束、９時半！　１０時５分前、来らず。玉川電車に乗る。中山様、関様、富士様、土田君の４人が一緒になる。電車の中、中山様冥目。僕も眠くなる。ローマ書１章とコリント前書６章とにより、Reinheit zwischen beiden Geschlechtern〔両性間の純潔〕のお話。ダンテを思う。政美兄上を思う。僕には本当に有難く響いた。それだけ切実に来た。政美兄上と嘉代ちゃんの清を思う。お昼は藤井先生、晩までミルトン、ヘブライ語を今日からGreenについてならう。聖日は全く聖勉強デーである。こんな愉快なことがまたとあろうとは思われぬ。

１０時半～１２時、聖書。

お午、先生と供に。

１時半～２時半、ヘブライ語。

２時半～４時半、ミルトン。

お話で長びき大抵は星が出るまで。星が出るとこんどは、伊藤様で晩御飯の御馳走。野中、佐藤君、伊藤玉江おば様、順子様〔註：伊藤順子（1911～2006）1933年に辰雄と結婚〕等と食卓を共にする。９時すこしすぎ帰る。星がきれい、聖い。何とも云えなく聖である。

本当に浮気でなくhumble〔謙虚〕にpure〔純粋〕にそういう気持で一日をいただく。６日のはたらきの日をいただく。またこの日、ありがたき日々である。

いつかまた暴風雨は来るだろう。そのとき躓かぬ様にしっかりしっかり、恩寵に甘えずにしっかりしっかり、深く深く。アーメン。

１９２７年１月１０日（月）

月曜は、学校はズベル。倫理はあったそうだ。（１１日夜しるす）

１９２７年１月１１日（火）

火曜は午前２時間あったのみ。雨の日。

１９２７年１月１２日（水）

晴。よいお天気。２時間しかない。斎藤様へ行く。お昼の御馳走になる。パンとテンプラ。井本威夫、上野の両君と共に。斎藤さん出かけられる。３人立つ。斎藤さん、相変わらず悲嘆憤慨して居られる。僕に成人したら「文学論を書け！」と云わる。ヘッポコ文士をやっつけなければ駄目だと云わる。意気に感じて帰る。僕にはもっと強いものがある。しっかりしっかり。男児だ「なにくそ！」と云うものがなければ駄目だ。斎藤様の言われる通りだ。一勉強、なんとしても勉強が出来て居なければ駄目だ。斎藤さん自身は、点数々々と云う馬鹿連が癪にさわって、わざとびりから出られたのはたしかに逸物で居られる証拠だ。その正義論者なるは敬服すべきものがある。斎藤さん位、腹の坐った、また公正な人は少ない。それ故に斎藤さんは強い。しっかりして居られる。

帰途、柳谷武夫君による。彼はこの冬、病で床に居た。才士多病とは彼のことだろう。同級の中で彼はしっかりした一人だ。

室の掃除をする。これから勉強。がんばるぞ。けれどもけれども、自分の力や、人に負けてならぬと云う動機で勉強することは過去のことだ。最早、勉強は聖なる聖なるつとめだ。神の命じ給うところ。「なせ！」と云われる故によろこんでなすのである。

人生は歩くところにのみあるのである。何がなされても心に歩くことなくして何もなされぬ空と等しい。ことは霊、信仰、内なること、である。徹底的にspiritual〔精神的、霊的〕である。げにああ、神よ、汝なくして我あり得ざるなり。アーメン。

He in me, I in Him!〔彼は私の中に、私は彼の中に！〕

汝なくして我はふるえる。おののく。

１９２７年１月１３日（木）

晴。学校２時間。眠い眠い。

１９２７年１月１４日（金）

晴。午前、学校へ行く前、政矣さんの見舞に行く。お留守。驚いた。まだ寝て居られるのかと思いきや、もはや病人にあらずと。さても西島実寿様は針小棒大に事を言わるる方かな。とにかく治られて結構。今晩たたれる由。西洋菓子をもって行っただけだった。

学校へ行く。帰る。夕飯。そうそう、今日は教文館に行った。Greek-English Lexicon〔ギリシヤ語英語辞書〕が１５円。高くて手が出ず。もうやめた。高くてやりきれぬ。ヘブライ語のコンコーダンス〔聖書語句索引〕も１０円。買いたいがこれをかうとゲセニュースをつかわなくなるおそれもあるのでやめる。丸善で、キルケゴールの「アウゲンブリック」〔瞬間〕を偶然見つけた。うれしかった。第１０巻もあったがやめる。その後、２冊買って学校の英語の時間に出て帰った。

１９２７年１月１５日（土）

晴。終日、家。昨日１０時にねたので頭の具合がよい。やはり早寝早起きは憲法であらねばならぬ。人間は色々と失敗してやっぱりもとへもどる。新説をあさりまわるのもやっぱりだめなのである。これ通俗哲学である。通俗哲学さえ体験しなければわからぬ。

それはそれとして、聖書の外、何処に行くとも道なきを知る。結局、聖書、聖書、聖書である。今日は泰ちゃんが大変傲慢である事を聞く。

「何をくずぐずしてやがるんで！　この野郎」

とおば様に言ったとの由。少々あきれ開いた口が閉じぬと云いたい位であるが、誠に気の毒な人である。僕の祈りは全く何時きかれるか知れない。おそらくこれは不可聴ではないか。十数通の書翰は空であったか。よろしい。とにかく神様におまかせする。彼のみよくなし給う。我はただ人にして祈らんのみ。さて、おば様もおば様で、もっと泰ちゃんをねばだめである。おば様もお風邪だそうだ。お気苦労も大層だったろうが、信仰のない人々はただ可哀そうであると云うよりほかに言がない。いかなる春も、いかなる冬も信仰のない人には真の幸福をもたらさない。

ミルトンとヘブライ語の明日。大分、土曜も忙しい。試験前日といえども藤井先生のところへ行かぬ聖日のなからんことを祈る。しっかりしっかり６日を勉強しよう。

天の兄上がそう云う風に歩まれた。天の兄上よその如く歩ませて下さい、祈って下さい。

ただミルトンの予習のみは減じていただかねばなるまい。１３巻が終る。１４巻そして願わくはもっともっと、聖旨のままに歩むことを得しめ給え。１３巻を有難うございました。けれども、神様、僕はまだまだです。なんと足がまだ弱いでしょう。しっかりしっかり立たして下さい。歩ませて下さい。

政美兄上はゆきぬ、さりぬ。

　　しばしの別れ。

しばらくせば、我も亦ゆかんとす、さりなんとす。

　　再会の日！

所謂死者よ、亡き人よ、

　兄上居まさざるの故に、我は飽くまでも兄上に忠ならんとす。

死者に忠、信、ならざれば、即ち之、虫よりもおとる。

我、すべての生ける人と戦うべくば戦わん。

　されど死せる兄上と戦う能わず、ただ従わんのみ。

千万人よ、我をののしれ、あざむけ、迫害せよ。

　されど、兄は主にありて我が味方なり。

この身、裂かば裂きね、

　されど、我は勝ちてあまりあり。

ほむべき哉、わが主、我が城、我が楯、我が磐なる、

義にして愛なる父なる神。　　　　　アーメン。

＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

**〔小池辰雄日誌 ⅩⅣ 1927.1.16～1927.5.10〕**

「彼は侮られて人に棄てられ悲哀の人にして病患をしれり」（イザヤ55･3）

１９２７年１月１６日（日）

聖日。朝は春、昼は黄塵万丈、夜は聖なる聖なる星の、月の夜。朝より晩まで新町。テモテ前書６章７節から１０節を主題としてのお話。金を愛するは大なる罪、罪の根である。ノートは別冊におぼつかない独乙語で書いたから略す。これとは少々脱線するが、僕は金がただ本を買う手段として欲しい。手に入ればすぐ本と化す。

午後はミルトン、今日は僕と佐藤勲君とでやる。この次は僕と野中兄。今日から井浪弘君が入る。ヘブライ語第２回であった。復習になって大層有難くある。僕とても彼等よりは僅か１０ヶ月たらずの先輩たるに過ぎず。大した差のあるわけでない。先生、冗談に曰われるには、「小池大先生！」と、大先生なんて言われたことは生まれてはじめて。しかも大先生藤井武先生からであるから栄誉も至極である。これは冗談の冗談たるのみ。

全く聖日は朝から晩まで天のこと、である。「余談が長くて」と先生が言われたが、「余談が大切で」と僕が言って大笑いだった。全く今日も余談が大切だった。

畔上先生のリヴィングストーン観に先生大いに共鳴して居られた、そのおは本当に胸に来た。よく思い出すは政美兄上のことである。兄上は全く小ダンテ、小リヴィングストーン、小クロムエルであったと思う。どう考えても、どうして彼はあんなに早く召されたんだろうと云う哀訴は僕の胸にのこる。けれども勿論、ある他の声が

「我がめぐみ汝に足れり」

と深く深く静かに仰る。

井浪君と共に帰る。帰宅８時。夕飯をいただく。読書、書翰。就寝、１１時。（月曜記す）

１９２７年１月１７日（月）

オーベルマンス。倫理（良心論）。

神田で、Johnson : Life of Milton.〔ジョンソン：ミルトンの生涯〕、

Kügelgen : Yugenderinnerungen eines alter Mannes.〔キューゲルゲン：ある老人の若い日の想い出〕。

木原で、Lange : St.John （Gospelの註解）〔ランゲ：聖ヨハネ（福音の註解）〕

Urwick : ……〔ヘブライ語省略〕……〔ウルヴィック：？？？〕

何れも多大の喜びと感謝を以て買う。神はよきときによき本を下さる。キューゲルゲンなんかどんなにほしくて夏休み前からさがしたことだろう。レクラムで古本で２０銭で買った。偶然の偶然！ではあるがこれ偶然であるか。決して然らず。必然の必然にして神は与えんとしたもうときに与え給うのである。有難くある。本を買う上に大真理を発見した。あせる必要なく、なまける必要なし。彼はよく導き給う。人生にもし幸を是認してよいならば、否、実際ある。それは神に於て。神の聖手の中にあるほど幸なことはない。

忙しいから今日はこれでやめる。これからおそらく日記は簡単になろう。けれども真理のみは書くを要す。志はよい。然らばどうかしっかり歩みてよ、辰雄！

１９２７年１月１８日（火）

晴、雨、晴。さばかるべき時近づきぬ。試みらるべきとき来りぬ。さらば、確く立ちて動くことなく、エホバによりたのむ。霊魂のこと、永生のこと、真理のこと、キリストのこと、父のこと、御子のこと、神のこと、愛のこと、義のこと。これは今の文科大学生の殆どすべてが知らないものである。教授も勿論知らないのである。我弱小なりと云えども、このことのために立たざるべからず。預言者エレミヤにあらざれど、誠に己が使命の小ならざるを思う。されば勉めんかな勉めんかな。

大先生内村鑑三先生は老年の境に入らる。藤井先生等そのあとを継ぐであろう。その次は僕達である。げに柏木の幹なる信仰のえに続きて日本のため鉄たり、骨たり、髄たらんことを。主の幹に対して柏木、勿論小枝たるにすぎず。人の中に何のよきものあらんやである。人、何事かなし得んやである。けれども、力を与え生命を与えてなさしめ給う父なる神様、主なるエス様のいかに讃むべきかな。厳粛に、真剣に私達の歩みを全うせしめて下さい。アーメン。

「彼は侮られて人に棄てられの人にしてを知れり」（イザヤ53･3）

アーメン、アーメン。文科大学教授、学生全部に憎まれ棄てらるる身となるも、真理の神のよしと見給う子となりたきこと、これ全心全霊のお願い祈りでございます。アーメン。

吉原の叔母様来らる。イザヤ書のこの聖句、今日深く与えられたのでこの巻の言とする。

もっと自信をもってよい。自ら力なしとする要なし。何をかおそれん。独、英、希〔ギリシヤ語〕、羅〔ラテン語〕、比〔ヘブライ語〕をやっつける、やっつける。大学３年間か４年間か知らぬが、在学中にやっつける。自信を以て、勇敢に。敵はそんなに強くはないぞ。語学の天才、政美兄上の弟ではないか。しっかりしろしっかりしろ。彼の精力、鋭き眼光と注意の注集、正にとってもって我がものとすべきである。

兄上よ、兄上よ、我、私、兄上のなさりたかったことをきっとやります。どうか私のために天で祈っていて下さい。若し私が何か出来たなら、それは皆兄上のお祈りの結果、結晶、血の力であります。神様はすべてエス様によって私達の願いを聴いてエス様によってさせて下さいます。すべてを彼に帰しましょう。私達は使われる人、僕であります。こんな嬉しい僕は世にありません。

１９２７年１月１９日（水）

晴。学校によきもの一つもあるなし。禍なる哉、文学の講義。禍なる哉、教授、学生。人間に聖なるもの一つもあるなし。誠に、

「鼻よりいきする人にたのむなかれ」

である。彼等、教授、学生の称賛し、もてる人物とならんか、即ちおわりである。我はエス様に従いて、サタンよ退け！と叫ぶ。また彼に従いて黙してらるるとなりたし。

世の人にこの福音がわかってたまるものか、である。我をして狂わしむるごとく言わしむる、はげに福なる世あるの何よりよき証である。

僕の内面は、おだやかなおだやかな従順でありたい。人には本当に涙を流す愛でありたい。けれども、これは容易に外にあらわれぬ。あらわれしめざるものは即ち世である。世を見るときに、いつの間にかおだやかの心に鉄の甲冑がかぶされている。の剣が手にされてある。けれども、本当に主の恩恵を知るものと坐を同じうするときには、春の野に光をあびて恩恵にひたる子供である。

「汝等世にありては、なやみ多からん。されどおそるるなかれ、我すでに世に勝てり」

アーメン。であります。げに主に共に居ていただいて私達はいつもの花さく野にあるのである。

１９２７年１月２０日（木）

晴。吉原の叔母様に５円のお年玉をいただく。今日帰らる。四郎君大体、古川にきまる。彼も安心、僕も嬉しい。あとは宣ちゃん、次は僕。僕なんかどこでもよい。来らば来よ！である。学校の友のあまりに心の友でないことに時々顔がくもって、僕は一日悲しんだ。それは実は友がほしくてではないのである。本当に彼等がかわいそうであるのと、お父様のおいたみを察してである。今日はこれ以上書かんとせず。ただ、

「ああ、エルサレムよ、エルサレムよ」（マタイ23･37）

アーメン。

１９２７年１月２１日（金）

晴。学校を休む。少々咽喉を害す。神様の下さる受くべきものを受けざるにまさる罪あるか。これ叛逆罪と五十歩百歩である。受けよ、と云われるのを拒むことは、これやはり叛逆である。げにこの罪をいくたたび犯したか。あの恩恵を受くべかりしを、とあとから悔ゆる心のつれなさ、勿論その悔いは益ありとは云えないが、よからざるなしである。それを前提として事にあたらんか、そは神をこころみ、自らをこころみたる二重の罪である。げに、受くべき恩恵は受けざるべからず。

「我が恩恵、汝に足れり」

は過不足の何れも意味しないことを十分知るべきである。勿論、不平をいう心の人につよきは拒み得ざれど、受くべきをうけざることのあわれさよ。人は己が功によらず、恩恵によりて。

神よ、ゆるし給え。恩恵のいたるところにあることを、もっともっと深く知らせて下さい。もっと受くる子たらしめて下さい。神の力、恩恵を拒みて我が身はおとろえ、疲れ、何もなしあたわずであります。

四郎君に就職決定の故に祝状を書く。願わくは、義に立ちて終りまで全うせられんことを。邪悪の世に雄々しき戦を戦われんことを。よろこんで君を送る。

１９２７年１月２２日（土）

晴。今年はじめての兄の日である。藤井先生に明日参上出来ぬかも知れないのでお詫びを書く。のどにとかくやられがちになった。今年は海へ行って鍛えてきたい。が何しろ病のことは人にわからぬ。来らば来れ。すべて「我がめぐみは汝に足れり」である。

しっかり、しっかり。世の中は邪悪だ。

しっかり、しっかり。我が肉なるものはおそろしい。

しっかり、しっかり。天にすがって歩め。

我が眼は上に。願わくは、終りまで全うせしめ給え。アーメン。

あきざる書は、聖書である。

友なる書は、聖書である。

私の本は、聖書である。

疲れたるとき読む書は、聖書である。

何がいやでもこの書のみは愛せざるを得ず。

ルカ伝を開いて読んでいる中に勉強を忘れてしまう。３０分余りもすぎた。これは大変だ。聖書は私におどろくべき魅力だ。すべての書をうばえよ。されど聖書一巻のみは我にゆるせ。牢獄に投ぜられるとも、旧新約聖書一巻のみは手にすることをゆるせ。聖書なる哉！　聖書なる哉！　今日はヒルティー先生が「すべてを棄ててキリストののみを読め」と言った、あの語を本当にそうだと思った。

１９２７年１月２３日（日）

晴。咽喉のため聖日を一人静かに武蔵野で。これで昨年の春から先生のところをお休みすること二度。一度はフルンケルで、二度はこの咽喉で。あの日は大変な出来事があった。忘れもせぬ１０月３１日、ルッターの９５ヶ条である。午後はきみ子〔兄龍二の長女喜美子３才のことか〕が見えなくなったあの事件。こんどは静かであってほしい。午前はルカ伝の後半。午後はミルトンとヘブライ語。新町を思いつつやる。Urwick:〇〇〇〇〔ヘブライ語省略〕を少しずつ読もう。今学年は色々なことをやった様なやらない様なものだった。がとにかく、ヘブライ語だけは一仕事だった。ミルトンは本当に先生のお蔭である。来学年を独乙語に長足の進歩をやってやる。今芽が出かけている。これをのがしてはならぬ。独乙語第一、英語第二、ヘブライ語第三、ギリシヤ語第四、ラテン語第五である。

「然はあれどエホバを俟ち望むものは新たなる力をえん。また鷲のごとく翼をはりてのぼらん。走れどもつかれず、歩めども倦まざるべし」

アーメン。９時！　我がために天にて祈る兄上よ、願わくは義と愛の僕にしっかり結びつく様に、おねがいします。Deep and sound faith! Amen!〔深くて健全な信仰！　アーメン！〕

１９２７年１月２４日（月）

四郎君から返信が来る。彼の人生観をきく。ロマンティックである。過去憧憬者である。ゆったりとすごすことがモットーだそうである。それあらば──その気持あらばよいとのこと──もしそうならば、我はいかにしてこの世にながらうべき、明日死するをむしろよしとす。全然、人生観の根本的に異なるを今更の如く知りて、彼のために気の毒に思う。母は、人は人と云われる。誠に人は人である。銘々異なる。我が人生観をれたりと主張するは愚ならん。されど我が人生観と云うものが僕にあるか。

我なし、観なし。これ神よりいただける人生にして、神によるよりほか、神にのぞむよりほかに人生はなし。これ云うを得べくんば我が人生観である。哲学、倫理でない。啓示、体験である。

母も兄も姉も、親戚の叔父も叔母も、従兄弟姉妹も、すべて我と道をことにす。

ああ！　ああ！

神様、私は何を云い、何をなすべきかを知りません。どうかお示しになって下さい。とにかく私はあなたにすがってのみ、人にどう思われようが、行きたくございます。義にして愛なる神様、お父様、あなたにのみ。貴きエス様を通して、アーメン。

主イエスの御言を福音書によんで無限の力である。

「汝、わがためにすべての人に憎まるべし」

アーメン。

佐藤勲君がわざわざ見舞に来らる。恐縮の至り！　僕は生憎、学校。本当にわるかった。昨日行かざりしためにかくも皆様に御心配をかけたかと思うと、無理してもゆけばよかったと思う。けれどもけれども、であった。

神様、どうか何が何だかわからなくなりますが、罪をおゆるし下さい。

「わが霊よ、汝なんぞわが中に思い乱るるや。エホバをまちのぞめ。御名を称うべければなり」

アーメン。今日、創世記第１章第１節を僕は読ませられ、訳せしめられた。実にこれは一生忘れられぬ気分であった。原典研究も信仰を害することはない。信仰は確められることさえある。安心した。いかなる言を以てあばくとも、我が信仰はくずされてはならぬ。否、然り！　消されぬ保証をイエス・キリスト生ける神に於てあきらかに与えられている。

神よ、永久にけ給え、力を与え給え。アーメン。再び、

「汝、我がためにすべての人に憎まるべし」

もはや我が眼はたしかにある意味に於て、母にも兄姉、叔父叔母、誰にもない。学校に勿論なし。かく云うは傲慢か。言う人をして言わしめよ。知る人ぞ知る。天の兄よ。

１９２７年１月２５日（火）

罪より罪へ、これおそろしいことである。

信仰より信仰へ、これ実に何よりのことである。

文学、芸術と云い、美麗なるすがたの乙女か魔女か。人生の高きは芸術あるの如くとか、何とかかとか。ああ、精進とか。いかに似て非なる真理よ。我等、絶対の信頼を云う。それ消極的なり、人間の価値なしと云う。げに論理の上で我は彼にまけ、彼等の云うところもなるが如し。されど見よ、罪を見よ。何ほど精進するも厳然として残る。罪を見よ。汝はやや罪から逃れりと思うか。人生努力のうちにありと云いて、そこに生命ありと云いて、何とかかんとか云ううちは、我は明らかに云う、禍なる哉！と。

クリスチャン、それは狭いが、実にこの世の子等の眼には狭い。天然観、人生観は何であるか。今晩、論ぜんと思わぬ。また出来ないが、ただ芸術文学者輩のとちがうこと、明らかにちがうこと。いかにも似たるところあるが如くして違うことを明言したい。勉強して彼等と戦う準備をしたい。

「汝、我がためにすべての人に憎まるべし」

アーメン。ミルトンの註解が３～１２まで集まった。今年中の仕事である。

１９２７年１月２６日（水）

晴。学校は午前のみ。今日は道徳、宗教、芸術。ことに後の二者について考えさせられる。なやむ。いつかこれがしっかりした別と、共通点とをとらえたくある。

今の気持はとにかくこうである。

宗教は人生の真なる方面である。──体験に主として生命を有す。

道徳は善なる方面である。 　──実行に主として生命を有す。

芸術は美なる方面である。 　──表現に主として生命を有す。

しかして、何れは真・善・美を要素として有す。されど各々その範囲に於て香をことにす。おなじ美でも、宗教の美と芸術の美とは香をことにする。

けれども、三者は相容れざるものではない。共通なあるものを有する。もし相容れずとせば、それは真の宗教でも道徳でも芸術でもない。

とうとう、お午から５時まで読んだり考えたりしてここまで来た。その先はもう考えぬ。これから読む。何年かしらぬが読む。勿論考えもする。けれどもいつか、説をなしてやりたい。おそらくそれは捕捉しがたき説となるかも知れぬ。それでよい。何となれば人生は真に表現し得らるる何ものよりも深くあるからである。しかして、僕としてはどうしても芸術家たるよりも、道徳家たるよりも、宗教家たるに適している。それは僕の香なんであるからやむを得ない。

ただしここに言う。宗教、道徳、芸術は勿論深き意味であること。……家も勿論その意味に於て。しかして、深き宗教家とは何であるか。それは人たること罪人たるを知り、神の何たるかを知る（体験が主）にある。宗教、道徳、芸術、各々独自であるべきで、互いに手段であるべきでない。がそこに相容れざるものはあるべきでない。がまた、共通点と云えども各々が独自なる故に、各香をことにする共通点であるべきである。

またここに言う。人生はそれ自身芸術である、詩である。万人は詩人である。誰かもすでに云っている。全くそうだ。この意味に於て芸術家たることに何人もさまたげない。然らざるに於て、むやみに芸術々々と云うのが浮薄なる現代人である。そこに文学、芸術ありや。我明らかに答えん「なし」と。

卵の一件。朝、寝坊したので顔を洗うとすぐ出かける。姉が「卵をのんでいらっしゃい」と親切に言って下さる。僕は直下に答えた、「僕はそんなことは大嫌いなんです」と。それはたしかに僕の感情でも、出まかせでもない。信仰のほとばしりであった。真理であった。真理ではあったが、姉の愛の心地に対してその答は穏当でなかった。「有難うございます。が僕はそういうことは……（とか）、（ただ）いりません（とか）」答うべきであった。道を歩いて今の答を顧みてかく思った。誠に愛は生命なり。真理も愛の衣をきざればと思わせられた。

さて、何故にそんなことが嫌いなのであるか。それは、神が朝食をくださるのに対して、僕は朝寝の罪をおかした。そして食べられなくなった──時間なき故に。それを一時まにあわせん卵をたべると云う気持は──勿論姉はこんな気持で言わなかったことはわかっている──僕の信仰には愛容れぬ気持であった。むしろ飢えて死すべき気持の卵であった。

しかし神様は事小なりと云えどもよきことを教えて下さった。そこに僕は歩ませていただいたことを感じた。人は罪をおかす。けれども人は常に真剣な心に心が向かいて居らねばならぬ。そこに僕は宗教に生きる。教会もなにも要らぬ。

鳥の一件。午後５時頃、兄も僕も二階に居た。北の窓から間近の電線にとまっている雀が３、４羽見えた。兄曰く、「ここから当たるね」「空気銃があるといい」「うまいよ」。小さい雀のとまっているところを見て思う軍人なる兄の心はこれであるかと思わせられた。僕は断じてその語に心の中で「サタンよ、しりぞけ！」「禍なる哉、生命をとらんと思う心、敵対の心、口食の慾の心」と。僕は笑って別に反抗はしなかった。もし、政美兄上だったらこのことは言わなかったにちがいない。僕と共に、

「神のゆるしなくして一羽の鳥も地に落ちず」

を讃えたであろ。

「汝ら我がためにすべての人に憎まるべし」

ああ主よ、十字架に私も。アーメン。

自分の長所と短所を挙げて、政美兄上と比較して見ようと思う。

　　　自分 　　兄

短所　１．薄志弱行 　　正反対

　２．不徹底 　　正反対

　３．注意散漫 　　正反対

　４．のろま 　　正反対

　５．非常識 　　正反対

　６．臆病弱虫 　　正反対

長所　１．涙の人 　　　　　同

　２．義を慕う人 　　　　　同

　３．快活な気分のある所、無邪気　同

　４．やさしさ 　　　　　同

ああ、政美兄上の欠点は、やや贅沢なところがありと云わば云えるが、これとても普通の意味での贅沢ではなくして、美、清をこのむ故、自然、よきもの、高価なものを買いたがる方であった。

　５．本が好き（中学時代の終りまでは然らず）　同

いかに彼は秀れ、我はおとれるかな。されど、我もまた賜りたる信仰によって旧き人をぬぎたり。願わくは、神よ、世の栄にまどわさるることなく、人の言に誘わるることなく、神の御言に従って歩むことを得せしめ給え。アーメン。

１９２７年１月２７日（木）

〔記載なし〕

１９２７年１月２８日（金）

昨日は朝はずべる。１０時から出る。どうもまだ鼻も咽喉もわるい。英作文は佐藤勲へあててのこの間の手紙の内容を書く。とても日本文の様な力が出てこないのに悲観した。内村先生なら英文の方が力があるのが書けるとおっしゃるだろうが。尤も内村先生の日本文は之また特別であるが。ヘブライ語、創世記第１章８節まで。帰宅後、あたまがぼけて何も出来ぬ。

今日は１０時はじまり。ゆっくりである。女子大学の生徒は９時はじまりと見える。僕が１０時はじまりの日やって来るのに会う。どうか、……〔ヘブライ語省略〕……であってくれたまえ。……〔ヘブライ語省略〕……である。

聖書に依れば、女はそんなに勉強する必要はないんである。がまあ人々性質ありて勉強もしたい女もあろうから、女子大学とやらへ入って学ぶのもよい。がどうか学を鼻にかけることは最も女のつつしむべきことなるを覚えていてくれ。

夕方、帰る。西の空に沈む日をのぞみつつ。げに自然は我が友である。自然なくば、何の人生と思われるほど。そして自然の中に暖かき父の心をさぐる。そのときに僕は全く天の兄上と同一体か、兄の復活か、辰雄か政美か、わからぬほど彼と私とは一緒になっている。本当に自分のすぐそばに、自分の中に、兄が声をかけて言う様である。

「辰さん、いい夕方だね、今に星も出よう。天のお父様を讃美しよう。彼の再び来り給うを待とう」

と。げにこれほど僕に愉快な賑やかなときはない。彼がいなかったら辰雄はどんなであるか。政美ありての辰雄である。彼がなかったら僕の人生はいかほどWüste〔荒野〕であろうか。げに一生離し得ざる友は彼政美兄上である。佐藤勲君がMy half〔我が半身〕或いはYour half〔汝の半身〕と云う。げに勲君と僕とはお互いにhalf〔半身〕の親友となった。けれどもこれぞ「天の数理」である。政美兄上はWhole〔全体、すべて〕である。My halfでは足りない。My whole〔我が全体〕である。My whole とMy halfとあわせればOne+halfであるべきをやっぱりOneである。これで天の数理である。

若し僕が４０、５０、６０、７０、８０まで生きようと、政美兄上は２７才の地上の生涯の上にやはり年を重ねて居られるから永久に我が兄（大きい兄さん）である。こんなことも考える。僕が白髪の老人となったとする。それでも２７才の兄上は机上にあって書斎にありてやはり我が兄として飾られ仰がれる。而してすべての我がなしたるは我がなしたるに非で我が兄上がなしたのである。今ヘブライ語をやるのも辰雄でなくて政美である。

辰雄の存在のすべての理由、意義は政美に発す。すべてを彼に帰す。彼の誉れとする。勿論この場、兄と云えどもキリストの枝たるにすぎぬ。枝の枝が僕なのだ。といって政美が辰雄とキリストとのMittler〔仲介者〕であると云うのでは決してない。そんなことがあったら大変だ。主よりつかわされた政美の一つの役目が辰雄を救へであったのだ。

どうしてこう悪筆なんだろう、あきれてものがいえない。世界最大の悪筆の選手は自分である。

すべてのものを奪わるるとも、最後に聖書までが奪われるるとも、父いまし給う。主いまし給う。聖霊助け給う。我がMy whole政美兄上、天に待ちてあり。ああ、私何をか嘆き、何をか悲しまんや。げに最大の楽天家はクリスチャンである。

その悲哀は深くして、しかもその歓喜は更に大なるはクリスチャンである。

１９２７年１月２９日（土）

終日自宅。午前、整理、無為。午後、勉強、猛烈に。気持のよい小春日和である。けれども一度風の襲うところとならんか、紅塵万丈である。

喬様が落馬して大いにかれた由。御気の毒である。泰ちゃんのこと、四郎ちゃんのこと、おば様のこと、今度の事、一つとして僕の眼から見て神の御試みではないかと思われぬことはない。どうか、しっかりして下さい。打たれて神にすがって下さい。けれどもこの御心のわかる日がいつだか知らない。無神の人、人間の小さな理性で神を笑う人、かくの如き人ほど不幸な人はない。そして世にはかかる人が充満している。その人は別に不幸とは思わぬであろう。それぞれ人生観もあるかも知れぬ。けれども、旧きより新しきこの世界に入った僕達は、もう彼等と共に神を人間の自然の呼び求めから仮想されたものだとか、何だとか、他山の石視することが出来なくなった。それはあまりに厳然たる事実となって僕を捉えている。誰も証明は出来ないだろう。けれども、証明の出来ないものの中にこそ生命が──この中にのみ生命が──宿っていることを人は知らない。それではこれで。いわれぬWeltschmerz〔世界苦〕である。かの詩人レナウ〔ニコラウス・レーナウ（Nikolaus Lenau、1802～1850）ハンガリー出身のオーストリアの詩人〕のそれとはまたちがう。かの偉大なる予言者エレミヤのそれである。

母が僕に言われた、

「どの方面となり傑出すべし。徹底せよ。偉大なる詩人となれよ」

と。有難きお言葉である。僕として一番なりたいものは本当の詩人とならんことである。けれどもそれもまた、きっと本当の人間となることに及ばないかも知れぬ。否、本当の人間となるときに本当の詩人となれる。生涯をして生ける詩たらしめよ。何を書かんにあらず、いかに生きんかにある。

武田の叔母様来らる。お孝さんの事で。相変わらず青木との不和。青木の方が悪くある。人を相手にしている中は人と人との間に平和のなりようはずがない。人と人とはただ神によってのみ平和にされる。このことのわからぬが一般人である。武田の叔母様はだんだんわかって下さる。有難い『新生』をこの冬、読まれた。藤井先生にお礼を言わねばならぬ。

いかなれば私は、かくだらしなくあるか。おお、私の力に何があるか。

神様、私は今宵、徹底させていただきとうございます。私はだめであります。こんなことでは駄目であります。どうかしっかり勉強させて下さい。私は時々思います。独乙語、英語に最もすぐれた人の一人になりたいと。本当にそうさせてください。勉強いたします。勉強いたします。どうか力を与えて下さい。

「然かはあれどもエホバを望むものは新たなる力をえん。また鷲のごとく翼を張りて登らん。走れどもつかれず、歩めどもまざるべし」

アーメン。

１９２７年１月３０日（日）

藤井先生。モーゼの信仰。

「エホバ神、汝等のために戦わん。汝等は静まりて居るべし」（出エジプト14･14）

……〔独文省略〕……。この前の日曜のアブラハムの信仰、創世記１５章を佐藤君のところできく。お祈りを以て始まり、お祈りを以て終る。……〔独文省略〕……。

お午はその子様〔藤井武の次女園子５才のことか〕のお祈りでいただく。「神様、いただきます」と。アーメンと云う。僕勿論それで顔をあげればよかったのだが、つい目をつぶってお祈りに入る。本当にわるかった。皆様をお待たせしてしまった。もうああいうことはすまい。

ヘブライ語は質問が出て、仲々進まなかった。註解書のお話と、相変わらず信仰のお話で。ミルトンは僕だけだったが、８時近くなった。ミルトンははなはだ不十分、いつもいつも、涙がこぼれたくなるほどの怠けさ。ああ。黙せん黙せん。実力へ実力へ。

神様、どうか、Sound + Deep faith〔健全で深い信仰〕をお与え下さい。アーメン。この二つの言葉は本当に本当に一生かかって味わねばなりません。

伊藤様でまた夕飯をいただく。９時半お暇。野中様と星をオリオンを仰ぎながら帰る。これは実に実によき思い出である。

再び言わん、黙せん黙せん。否！　神様、だまらせて下さい。だまる力をお与え下さい。

１９２７年１月３１日（月）

とうとう１月も終る。学校は選挙でハリガミである。田代四郎氏を推す。我知らず。ただ彼の風貌態度に見るべきものあるを以て。石橋先生休みで、お午まで。いよいよ明日はレナウの紹介。こんどは独文科の係だそうだ。困ったことだ。聖日には断然なにもなさぬつもり。そのかわり普段の日ならば御用をたそう。ことに図書掛りなら結構。ヘブライの詩に関する本を今日みつける。買いたきが、お金がない。やめる。

先生は昨日言われた。人生は刀折れ矢つきなきまでさんざんに戦ってこそ人生である。彼に信頼する事とこの事は矛盾しない。これは決して世の所謂奮闘努力ではない。そして終りに、落日にあらずして旭日をのぞみつつかの国へ行くんである、と。アーメン。

“Ich habe der gute Kampf gekämpft.”〔我はよき戦を戦った〕

と言ったパウロの言を誤解してはならぬ。サンザンに戦いつくした意味である。

論理、説明の人たらんよりは、直視の人、詩人たらん。真理は後者に於てより豊かな香あり。そして、人生の真理は竟に直観の真理にあらざらんや。

如何なる書翰を僕は真剣に書かなかったか。如何なる書翰に僕は嘆息を発しなかったか。何故に受ける人々は僕の心を汲んでくれないか。勿論、僕は自らを知られんがために書くのでない。僕の心を汲んで、と云うのは幾分なりとも僕の嘆きを嘆きとしてである。ああ知らず。彼等は終に泣き悲しむのでないか。ああ我が友、佐藤君よ、切に汝の祈りを要す。

青木の諸従兄弟、武田の叔母、吉原の叔母、山本の人々、どうして母上も（これはやや例外）、兄も姉も来りて見ざるか、新約と旧約を。ことに旧約を。げに藤井先生の言わるが如く、旧約をMy book〔我が本〕と言うにあらざれば、Faith〔信仰〕はsound〔健全〕にならずdeep〔深さ〕にならずである。

倫理学の先生よ、それは竟に自律なり、滅亡なり、無生命なり。我、今日は大いに悩まされてにここへ来る。

Vertrauen auf Gott!〔神に信頼せよ！〕、sound+deep〔健全＋深さ〕、pure+simple〔純粋＋単純〕、humble+dignified〔謙虚＋品位〕、strog+silent〔強さ＋静か〕にAmen!〔アーメン！〕

１９２７年２月１日（火）

喬様に３時間にり、６枚の長文、独文の信仰書翰を発す。我言わんとすることついにGott〔神〕の一字にも達せず、不信者を励まさんとするとき、ああ何と骨が折れることよ。Wahrheit〔真理〕を以てをあらわすの苦しさ。Liebe〔愛〕をとき得ざるの苦しさ。基督教の本当のLiebeが誰にわかるか。げにまがれる世なるかな。

本当に時々思う。伝道師にならんと。学校何ぞ。学識何ぞ。人霊を救うの善にしかず。伝道のための学問ならどんなにでも深くしてやる。多大の時間を費やしたが損せりと思わず。これによってもし喬様が幾分でもGeistig〔霊的〕な人間になってくれれば満足。神様に一切のお導きをまかす。いい難きの嘆き、ああこの嘆き、もし自分が負うならば到底僕は今日も死なり。偉大なるWelt-Schmerz〔世界苦〕である。がどうであるか。

エス様がすでに十字架で!!!　して見ると旧約の予言者の苦しみ、ことにイザヤ、エレミヤのそれはどれほどだったろう。Lenau〔レーナウ〕の紹介３分の２にもならぬうちに２時間経つ。読みつづけに読んだのであるが。自分ながら驚いた。まさか２時間をこえようとは思わなかった。１冊読んだが２冊目（２丈どじ）が残っている。この次にまわすことになる。とにかく皆はよく聞いていてくれた。それだけでも有難かった。

いよいよ、図書館、研究室の委員になるかも知れぬ。T.〔田代四郎〕なる人曰く、「先生との交渉もあっていいことがある」と。このT.なる人何ぞ知らん。昨日推挙して、９１票の最高点を以て当選せる人。彼にしてこの言ありとはいや意外でもあったが、やはり信仰のない人は此んなものと思い、外観は僕より強そうな奴ばっかりだが、霊魂は僕より弱い奴ばっかりだ。

人を何ぞおそれんや、を明らかに、事ごとに、せられて有難し。信仰、信仰である。我はそんな不純な動機で委員を承諾し得ようか。神様の御顔を見るがよい。

歩まんかな、歩ませていただかん哉。感謝にて我が涙はこぼるるなりであります。

苦しみ、それもエス様が負って下さり、よろこびそれもエス様が与えて下さる。アーメン、アーメン。

とうとう大きい兄さんと僕だけになった。どこにも（新町をのぞいて）味方はいない。よいよい。神様のもとでいつか。アーメン！

１９２７年２月２日（水）

晴。学校は午前のみ。午後は山本へ行く。また、小さい連中につかまって何も出来ず、遊んでしまう。残念。子供のために情に負ける。姉様にズボンを（ミシンで）縫っていただく。夕飯、肉のつけやきを（はじめて）いただく。おいしいもんだ。おさしみも。御馳走だった。夕６時お暇。ローマ書８章、詩篇１９篇、２３篇を読んであげる、姉上に。姉上はきっと信仰に入れる。教会的な方面がやはりキライだから。その傾向が僕の心に光をみさせてくれた。どうか、信仰へ。祈り奉る。

柏木今井館へ行く。佐藤勲と二人で。星づく夜。まっさきに行った。堂は満ちるほどは来なかった。内村先生はお風邪の由。残念である。藤井先生は全く註解ぬきのエッセンスを与えられた。それについて研究しなければならぬ。しかしそこに十分にある熱があった。先生としては不出来であった様に思われる。塚本先生の助言か註釈言か、とにかく面白くうかがった。帰ったのは１０時。母は斎藤様へおとまり。今井館へ行って、内村、塚本、畔上先生のお話も時々うかがいたくなった。が、日曜は午後のミルトンとヘブライ語があるからだめである。『聖書之研究』でしっかり教えていただくより仕方がない。柏木なる語は我々に、ある言い難きの響きである。これ信仰の古巣である。

１９２７年２月３日（木）

晴。学校。お午から４時半の英語まで待つ。竟に殆ど無為。昼寝と柳谷君に書翰。ヘルデル〔ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー（Johann Gottfried von Herder, [1744](https://ja.wikipedia.org/wiki/1744%E5%B9%B4)～[1803](https://ja.wikipedia.org/wiki/1803%E5%B9%B4" \o "1803年)）[ドイツ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%89%E3%82%A4%E3%83%84)の[哲学者](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%93%B2%E5%AD%A6%E8%80%85)・[文学者](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%87%E5%AD%A6%E8%80%85)、[詩人](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A9%A9%E4%BA%BA)、[神学者](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A5%9E%E5%AD%A6%E8%80%85)〕を少し読むのみ。柳谷君の正直な良心に忠実な声を聞いて、今の学生の中には珍しいと思った。芳賀に比すればはるかに彼の方が慕わしき人物である。

帰宅後、ヘルデルを読む。藤井先生の「ヘブライの詩」に刺激されて。なるほどヘルデルを引用されたことがわかる。本当にヘブライ語に熟達したいものである。

団君に久しぶりで会う。彼を見るとら兄の反響を見るが如き気がする。彼に対して失礼な申し分かも知れないが、彼はそれほどある慕わしい印象をあたえてくれる。中学時代よ、かの同心町時代よ、私はどうしても過去を忘れることは出来ぬ。ある意味に於てたしかにロマンティストでもある。けれども過去にして現在、未来を忘れ得る人間ではない。過去の美の故に将来の更に美であることを信ず。その過去は死でない。甦りの更によき将来の約束である。げに旧約と新約とである。

１９２７年２月４日（金）

晴。雨が降ってくれるとよいと思った。乾燥しすぎている。柳谷君を見ると何だか気の毒に感じた。どうか彼も福音の何たるかがわかってくれると有難い。その日を待つ。学習院の人にしては珍しい。勉強家であり、人もしっかりしたところがある。サッパリしている。芳賀の政策的、陰険なのに比しては大なる差である。

近頃切に、自分の使命のただならざるを感ずる。

第一に、内村、藤井、塚本、畔上、佐藤、諸先生の教えを受けている自分としてどうしても福音のために、と云うものがある故に。独乙語、英語、ヘブライ語、ギリシヤ語、ラテン語の５語をしっかりやらねばならぬこと。実にこれは一生の仕事である。聖書の精読、熟読である。

第二に、文学の学生たる以上、独乙文学、芸術の何たるか、世界文学に眼をそそがねばならぬこと。実にこれ過重の荷である。けれどもとにかく、宗教と文学の二方面にしっかりしたものをつかんで行かねばならぬ。

第三に、哲学である。哲学はどうしてもなおざりにすべからざるものである。哲学がなくては思索の健全、論理的頭脳に欠陥なきを催し得ず、戦の武器としても必要である。之を要するに、第一に宗教、第二に文学、第三に哲学である。否、むしろ、哲学は第二に来るべきである。しっかりしっかり。確実に確実に。

けれども、最大のことは、すべてに於て歩むことの一事である。すべてに於て歩むことなくんば何の人生であるか。げに、僕はもはや、生ける父なる神、いける主イエス・キリスト在まさずとはどうしても考えられず、これなくてどうしても、善にもあれ悪にもあれ、生きること能わず。それほど、ああ汝を要す、ああ汝を慕う。詩42･1、アーメン。

家の財産豊かならず。大学は３年でなさざるべからざる事情にあり。

げに、政美兄上は先だてり。三郎兄は知らざるうちに。父は逝けり。愛子はす。富士子姉上は他人へ行けり。龍二兄上は妻を有つ。母上は失明の身、人生の下り坂（所謂）、暮も近きお年。ああ、我は独りである。げに独りである。独立するを要す。然り我は３年にてすませ、独立の道をとらざるべからず。我とても、兄上によって生くるは心よからず。げに今にても苦学して独立したき心地す。されどそは身体も事情もまたゆるさず。大学は３年にて出づべきなり。勉強は一生の仕事なり。さらば、

「めさめよ　我が霊　心はげみ　力のかぎり　いそぎすすめ」

アーメン。ああ、金銭の事、つまらなきことながら、軽んずる能わず。金銭にて独立し能わざれば即ち之、人として、男として資格なきものなり。げに事は真剣なり。人に負うところあるほどつらきことはなし。負うところはただ神に於てあれ。人に於てある勿れ、である。

１９２７年２月５日（土）

雪。起きたのは９時すぎ。掃除をして静かに書斎に入る。お祈りをする。高島鴻子おば様のお写真とお手紙を机の上に出す。

「私はイザヤ書に引かれて毎日朝９時頃、誰れも在らぬ時、お恵み頂いて居ります。今日は丁度５０篇（毎日１章ずつ）５節から９節が本当にありがたく感じて毎日私にこのお言葉の通りと教えてくださいます」

と最後の書翰にお書きになられたとき、どんなに僕にも旧約をしっかり読んで下さいと、お心でお祈り下さったことであろう。僕はそのころ旧約に手が出せなかった。ごく断片的にしか読んでいなかった。本当に本当に、悪くなった。おば様をおよろこばせしたのは、僕の一時的な興奮であったか──否、そうではなかったが──とうてい今日の僕ではなかった。もっとしっかり歩んで居らねばならなかった。天のおば様よ、この頃の、またこの後、更に更にの辰雄のために、新生のあの辰雄をよしとお赦し下さい。

ミルトン、ヘブライ語、教育学史、オベルコンス。寝る。

１９２７年２月６日（日）

晴。雪の朝、「子供が犬の様によろこんで」──藤井先生が言われた──「は子供だ」と。新町へいそいだ。花（フリジヤとカーネイション）５０銭を買って先生にあげる。先生知らず、人知らず──（女中のみ知る）──やがて送られたる女の方の美しい多くの花の中に交えられて、僕のはどれだかと云う位に圧倒される様。けれども小さき小さき心の小さき小さき花がそこで咲いていてくれた。今も先生のお机の上に咲いているだろう。神のみ御存じ。日記に書くさえヤボである。知る！　最大、最善のことは、神知り給う！　神のみ知り給うところにあると。沈黙せよ沈黙せよ、沈黙させて下さい、沈黙させて下さい。神知り給うほかに誰に知られんとするか。一生をして草の如く知られでありたし。神の眼よろこび給えば、それで我がさかずきは溢るるなり。アーメン、アーメン。

ミルトン、ヘブライ語、相変わらず。午前は詩５１篇。眠いから今日はやめる。おやすみなさい。

１９２７年２月７日（月）

誕生日、満２３才になる。御大葬。罪人は竟に罪人たるのみ。我何をくるしみて一善をなしし。ああ、我無力なる哉。神のなし給うところ、そこに生命あり。善はこれ神なし給うなり。我なすに非ず。

「キルケゴール」（独文）der Augenblick〔瞬間〕を読んで、その峻烈なる教会攻撃に驚くほど。北欧の勇士、信仰の勇士と思った。全く、藤井先生や塚本先生のよりである。『旧約と新約』８０号「無教会号」とは実に思い切った呈題である。その題がきびしいだけ、反感と誤解も甚だしいだろう。先生方よ、甚く

「我が名の故に汝らすべての人に憎まるべし」

を心からアーメンであります。私達の心は戦争にない。静かな静かな、深い深い、聖い聖いところにある。ああ、外界の汚の故に──勿論我自ら清しとするのでない──我等は戦わねばならぬ。されど我等の基調は、黙って忍ぶべきを忍び、愛すべきを愛して、神様とのみはなしして行くにある。これで十分。アーメン。

外的行為よからんか、それが信仰の生活かと見え、外的行為にみだれんか、信仰はあんなじゃだめだと見ゆ。ああ、信仰の何たるかを自ら体験せんとせずして、人によりて書によりて知らんとする人のいかにカタクナにしてあわれなるかよ。沈黙！　沈黙！　もう沈黙よりない。やはり、大きい兄さんがとったあの道こそよけれ。僕をしてこの日を限ってと云うにあらざれど、願わくは２３のこの日も一つのWendepunkt〔転換点〕となって、あの政美兄上の道、歩みし跡をしっかり歩ませて下さい。

忍ぶべきをしのびて、だまって、静かに、しっかりと。アーメン。

１９２７年２月８日（火）

２月７日続き（８日に記す、また８日の日記でもある）。夜１２時４０分と云う時、御霊柩車が我々の家々の前をお通りになるので、車道近く待った。たる寒気である。また何と美わしい冬の夜の星であろう。北斗七星が、さっきは下の方に大きく見えたのが、今はあざやかな回転をなして高く小さくかかっている。スバルが西の空にキラキラとゆらめいている。オリオンもそろそろ西山へである。実にコボルルヨウに一杯、と子供らしく言いたい位である。２０分程お待ちし奉る間に流星を４つ見た。第１と第４、ことに第４の流星の長き尾には驚いた。汽車は速くてよくは拝し奉られなかったが、古への装束せる人の冠がならんでいるのが窓をこして見えた。一寸異様にも感ぜられた。井ノ頭の方へ消え行く車を遥拝し奉り、何ともいえぬオサエラレタ気分と、一赤子の忠誠を自覚せしめられて帰る。

然り！　「カイザルのものはカイザルに」であって、我等この国土に生まれたるものはカイザルの命に従いカイザルに忠であらねばならはぬこと明らかである。日本の国体をきづつけんとする売国の徒は誰であるか。３時に寝る。

今朝は１０時に起きる。日は高く昇っている。しかし、よく寝て気持はよい。

知らざる信仰の姉、真田章子様。

さて昨夜、何気なく、『作楽』第３８号を開いて読んでいると、章子と云う方の「遺稿」がある。「猿沢の池」「三笠山」「病を得て」「手」など。歌人であるのに僕などは遠く及ばぬ。和歌はよい。とくに女の人にふさわしいなどとも思われたが、たしかにこれは日本文学の花である。俳句よりどうしても和歌の方がよい様に思う。その中に曰く、

「病みてより親しき友も打たえて　ひとり淋しく秋をむかへり」

「秋たちてうら淋しさぞ身にしみぬ　我より去りし友をおもへば」

◎「かの友はかの友こそはと思ひしに　夢の破れしあとのさびしさ」

如何なる場合であったかよくは勿論わからぬが、信仰の友と思いし彼こそはと思っていたその人がついに我を離れて（信仰をはなれて）しまったと云う心ではないか。して見れば、彼女はよく戦われたらしい。政美兄上のためにこの歌を思って見て、この一首また兄のある（a certain）友に対する嘆きでないか、祈りでないか。ああ。よくも歌い出でし彼女、知らぬ真田章子様にお礼を申したい。このあとにまだある。それこそ僕が７日、僕の２３の日にはからずも君に──知らぬ信仰の姉より──いただいた一首である。それを今日、一寸書いて、聖書のみかえしに書く。乞う章子様この一首を僕のものとして書いたことをゆるし給え。御身を知らねども、その巻首にあるお写真で知る。多謝し奉るのみ。曰く。

◎「若くして逝きし兄上よ　残されし古き聖書はわれを救へり」

僕は、

「若くして召されし兄よ　残されし古きはわれを救へり」

とした。彼女もして見ると、信仰の兄上を有し、彼行き──先だち──自分が残されそして信仰に入ったと見える。おそらくこの推量はあやまりないだろう。その点よりして全く僕と同じ経験である。その彼女はまた若くして召された。天に安からんことを。アーメン。また曰う、

「いち早くたほれし兄よ　我こそ病にかちて御霊やすめん」

げに彼女は病に勝ったのである。兄のみたまを安め得たのである。病に勝ち死に勝ちて兄のもとに。主の御許に召されたのである。故に彼女の臨終の言は信仰のそれ──正に僕の兄のと酷似している──曰く、

「お先にゆきます」

と、御両親に。その信仰のあざやかな跡は、

「只一人歩むはいとど淋しけれど　神を思へばちからづけらる」

「涙して朝な夕なにキリストを祈る心よ我は幸あり」

「淋しさにたへずなりておん神に祈りまつれば涙消えぬる」

「何かなし声はりあげて讃美歌をうたへばはるる我がこころかな」

◎「若き日の望みにみてる喜びは我をされどもわれ神を得し」

「暖き愛に育ちし我やみて人の心のつれなさを知る」

また「手」の中に、

「辛ふじて編物のみを許されてうごく手先にみてる喜び」

「オブラート包みなれたる手先にも目立ちて痩せの見ゆるこのごろ」

そしてこの友をおくりたる弔文は正に不信者である。この友はついに心の友（信仰の人）からおくられなかったと見える。げに誰におくられずとも、キリストに迎えられたる彼女は誰よりも賑であったのである。喜ばしくあったのである。

「彼女はとして逝けり」

とある。実に幸なるはクリスチャン、ことにこの臨終の勝利に満ちた門出である。永遠の国へ。アーメン。再び、彼女の霊、安らんことを。アーメン。

日本、古典、明治大帝、大正天皇、昭和天皇陛下、日本国民、武士道、幕末維新の志士。大いに考えねばならぬ、重要事項である。書きたきこと多けれど、書く暇なし。後日にゆずる。ただ一言、

私は独乙語の先生になるとも、一朝事あるときは、変じて愛国の勇士、純福音伝道の戦士、人に棄てらるるとも、義と愛とにて終生貫くの士、たらんことを覚悟し居るなり。職業の如何を問わず、もっとも人らしき人、日本人らしき日本人、主のらしき僕たらんとするものなり。

我等、「なせ」と云われたときに、なすのが信仰である。「よせ」ととめられたときに、よすのが信仰である。我救われんために、我幸ならんがために信仰あるのでない。信仰ありてこれらのことは付随してくるのである。また付随せずとも可である。∵〔なぜならば〕神の聖旨ならせ給えが信仰であるからである。この点に於て全く武士道と精神を同じくする。主君のためには身命を賭しても従い、義のためには、死はの如くかろくあるのが武士道である。基督教とは全くここにその大なる根を持っているものである。然るに如何に今のクリスト教は之とことなれるよ。

内村先生をはじめとする、柏木、新町の先生方の云われるのもこれである。キルケゴールのかつて叫んだのも、ルッターのあきらかにしてくれたのも皆これである。主キリストが福音書にてあきらかに兵卒の信仰をたたえて居られるではないか。ああ、禍なる哉！

　〔註：真田章子姉の写真（晴着姿の）貼付あり〕

「病みてより親しき友も打たえてひとり淋しく秋をむかへり」

「かの友はかの友こそはと思ひしに夢の破れしあとのさびしさ」　（信仰の友）

「暖き愛に育ちし我やみて人の心のつれなさを知る」

「若き日の望みにみてる喜びは我をされどもわれ神を得し」

「何かなし声はりあげて讃美歌をうたへばはるる我がこころかな」

「淋しさに得たへずなりておん神に祈りて見れば涙消えぬる」

「若くして逝きし兄上よ残されし古き聖書はわれを救へり」

（この歌を発見したときは全く我が胸をうたれた。これは正に僕の心そのものである）

「只一人歩むはいとど淋しけれど神を思へばちからづけらる」

「お先にゆきます」の一言　 （大正１４年１０月）　（抜粋）

彼女は郷里広島の地に帰れりと。

僕は何も彼女について知らぬ。しかしこの一箇の歌集によりて彼女の信仰の故に、ただその故に彼女を送り、彼女のために祈る。

１９２７年２月９日（水）

独文１年同窓会、１時から４時までよし松楼上にて会費２５銭。不愉快であった。何としても彼等と僕とは氷炭相容れぬものがある。なる哉。天にけるものと地に属けるものとなれば。もう何やかやと彼等を難ずる言を吐くまじ。ただエレミヤの言を言として、心を心として天に叫ばん。天に祈らんのみ。新町の佐藤勲に書く。ああ、我サタンと戦わんために神の武器とらんかな、武具をよろわんかな。ああ、我サタンの子らのため涙のつきんまで泣かんかな。準備、準備。戦の準備。彼等と戦わんために。智に於ても何ぞサタンの子らに負けんや。

さんざんに戦わん。呼びて戦わん。刀折れ矢つきてもなお戦わん。おお神よ、汝在ますが故に、我が戦はいかにみじめに敗れんも、我勝ち得てあまりあらん。主よ、願わくは助け給え。アーメン。

１９２７年２月１０日（木）

はじめてスウィフト教授、休まる。きけば石橋先生さえ在学中ならいたるなりと。その年輩の程推して知るべきのみ。「イスラエル宗教史」のreport〔レポート〕である。「預言者とは何ぞ」と云う題である。否、随意選題であるが、かく定めた。論文と云う奴はそもそもはじめてである。

ああ、我、何を言い、何をなして人を救い得し、得ん。されど我が心、口、主を思い、言わずしてあるべけんや。げに伝道とは、主を、神を、父を、エスを言いあかすの外にあらず。いかにあせりても駄目にして、ただ真理を天に向かって叫べば──人の救われる救われざるはそれ神のなしたもうこと──よい。

武田叔母よ、来たらざるもよし。母上よ、我々の信仰に来らざるもよし。兄よ姉よ、来たらざもよし。

我はただエホバと共に歩ませていただき、福音を沈黙のうちに身を以てのべんのみ。人は相手にあらず。人を相手にして失望せざることなけん。人を相手にせざらんか、その希望を有つや実に永久に於てあり。実に悠然たるものあり。一字の効を見んと思うものはすぐやぶることを知らん。我は持久のことのみをこのむ。午後１２時。

１９２７年２月１１日（金）

紀元節。

「迎えらるべき者の我が家族、我が親類に

我一人ならぬを祈りて」

１９１８年２月１１日　　　政美

彼祈りてここに９年！　正に僕と同年なりし兄の祈りよ。彼満２６年誕生日を送って間もなく召された兄である。ああ、彼は僕より享年にして見て３年の長にして逝った。僕今２３に満ちた。あと３年！　あと３年！　あと３年で僕は召されし兄と地上の生を年月に於て同じくすることになる。おお兄よ、願わくは、この罪の身のために天にて祈り居られよ。願わくは、“Entweder-order”〔あれかこれか〕の明晰なけじめを僕にあらしめ給え。天につけるものは天にけるものの如く歩ましめ給え。

天に大なる罪三つ。一、貪欲。二、姦淫。三、怠惰。

罪の身は、罪と云う罪をことごとくおかすなれど、日々の生涯はあまりにみじめなれど、願わくはこの三つの罪を、「サタンよ退け！」と退けしめ給え。げに神よ、高校４年はとくに第一の罪に於て大なりしため、我身をそこないたり。肉おち、顔色蒼白、無気力におちいりしこと幾度なりしか。げに今もキルケゴールをよみて、左の一文に我が胸を打たれぬ、刺されぬ。曰く、……〔独文省略。キルケゴールの「瞬間」からの引用〕……。

けれども、讃むべき哉、我が神。我はとにもかくにも、あの当時の愚は断然なす能わざるに至れり。薬石を用いしこと３年、その心身、貨幣、時間の浪費はいかばかり大なりし。されど、我その罪より救われたり。食物のこと思い煩わざるに至れり。こと些少なれども我に於てこれ大なる経験なりき。罪は大にして愚なりしと云えども、サタンのいかほど強く誘惑するものなるかを知り、己れのいかほど無力、汚れたるかを知り、神のいかほど絶大の恩恵、愛、力の御方で在まし給うかを知りて涙に咽ぶものあり。このことなかりせば、我は今いかなる道にあるやもはかり知れず。げに神の恩恵の無限を如実に感ぜしめられたり。人生、この喜びにまして大なるものあるや。罪と無力と神の義とを知らしめられるにまして大なること人生にありや。

げに彼女がいみじくも歌い出でたることを我もまた返さん、

「若き日の望みに充てる喜びは我を去れども我神を得し」　真田章子

勿論この場合、「我神を得し」とは、我が神を捉えたりと云う文字そのままにあらずして、我神に捉えられたり、故に我神を得しと云う意なり。かえってそのまま、捉えられたりと云うよりも余韻のある言い方にして知る人ぞ知るである。あだかも、我神を愛すと云うとき、我が神に愛せらるるの根本にして先の問題なること明白なるが如し。

げに高校入学当時の野心と希望の喜びはすっかりくだかれたけれども、我神の御手の我にその故にありたることを感じせしめ、得らしめられ、我がよろこびはdiese zeitig〔この目下の〕のと比ぶべくもなきなり。

第二の姦淫は如何。人よ知るや、我が姦淫の罪を。我日記に書き得るや、我が姦淫罪を。書くの要なし。神はよくよくごぞんじである。けれども、幸なりしはいつもいつも我が道義心、宗教心のはるかにこれより強烈なることを。故にかの白粉をつけたる女は我が眼に毒蛇となれり。かの淫猥なる語をこのむ青年の座は我がたえられざる座なり。まことに詩篇第１篇である。

「エホバをおそるる女のみほめられん」

であって、我が眼は地的にけがれ、我が思い地的に堕することありとも、我が内なる聖霊のささやきは我をしてあだかも磁石の北を指すが如く神に向かわしむるなり。

第三の怠惰は如何。げに怠惰にまさる青年の学生の罪もさほどはなからんと思わる。或る場合に於て姦淫罪を越える。∵それはしばしば姦淫罪の動機であるからである。

貪欲、姦淫、怠惰の三大罪に対して、とくに人よりも特に鋭敏なる良心を得せしめ給え。このことに於て浄く浄くあらざれば、禍なる哉！であります。しかして世のだれが真にこの罪に対して真剣であるか。暁の星の如くである、その々たること。

敢えて云う。我が天の兄はこのことに於て全く主によりて勝てりと云いて可ならん。彼は貪らざりき。彼が本屋で一言もまけろと云いたるをききしことなし。また、よく母に、

「政美はものを高く買ってくる」

と云われて、政美兄上は、

「まけろと云うことはどうしても僕に出来ない」

と云われたのを憶えている。

姦淫のことについては全くpure〔汚れない、純潔な〕であった。かよ子様、きみよ様に対する関係に於て如何にpureなりしかは天のお父様、高島のおば様、或は藤井先生のよく知り給うところである。誰が兄の様に女性によってpureの何であるかを真剣に体し、そこに歩んだ人があるか（勿論ないとは云わぬ。けれども僕はとにかく知らない。たしかに一人も知らない）。

第三のこと怠惰については如何。最大の勤勉家は兄であった。彼の精力注集と活躍と敏捷と猛烈な勉強ぶりは今もあざやかに我が眼裏にしみている。

神よ、願わくは、召し給いし政美兄上の様に、そのpurity〔純粋、純潔〕とdeepness〔深さ〕とdiligence〔勤勉〕とcourege〔勇気〕とにお父様の子として歩まして下さい。いつまでこのみじめに居るのでありましょう。もし、

「ああ、エルサレムよ、我いつまで汝らと共に……」

と云うお言葉が出ては大変でございます。どうかこの汚れたる身の故に、それ故に、ただもう信頼々々に歩ませて下さいまし。とうときお名により。アーメン。

青年の夢が理想が知らねども

かくてあらなん　外に道なし。

げに神の道、神本意の道、信頼の道、人を問題とせざるの道、この外に道はないんである。青年の夢でも理想でもない。人生の本源である。人生の人生たる所以である。

　人はまよえど　主の道は

ただ彼にのみ　たよるにぞある。

まてしばし　時いたりてか　知らるなれ

何がまことか　何がいのちか。

世の人よ　苦しまざるや　いまのとき

いのちの水は　砂漠にぞある。

我は書翰をかくのに実に時間がかかる。そは祈らざるを得ないからである。そしていつも書いては、あるしみを感ずる。そは到底、自分の心の願いがそこにあらわれないからである。幾分の一が書き出されるか、いつも「だまって居れば」と云うものがある。けれどもまた僕をして筆をとらしめる。ああ、これそもそも何であるか。クリスチャンの余事であるか。伝道的好奇心であるか。はたまた、人にみとめられんためか。人を己れと同じ信仰へと導かんためか。否！否！　決してしからず。すべての……のため、にあらず。ああ、われ捉えられて、やむを得ざるなり。神が私の筆をどうしても動かし給うからである。人にいかに思われようと、そんなことはもはや問題のモの字でもない。それ故に、真剣である。いかなる手紙を僕は涙なくして書いたか、嘆きなくして書いたか、祈りなくして書いたか。

ああ、世の人よ、不信の人よ、我が友は新町に指を折るほどしかなし。ああ。げにエレミヤの嘆き、イエスの嘆き、ダンテの苦しみ、キルケゴールの憤激。ああ、ああ。

「斯くのごとく御靈も我らの弱を助けたまふ。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御靈みづから言ひ難きをもてし給ふ。」（ロマ8･26）

ローマ書８章２６節が本当にアーメン、アーメン。

天の兄よ。９年前の今日の兄の祈りをまたまた、アーメン。

『聖書之研究』来り、「教会の不信」を母と兄と姉の前で音声した。さすがに兄も驚いていた。塚本先生にのアーメン。藤井先生の「無教会号」と期せずして同月にであったこと、また世のヤローはとやかく云うであろう。けれども、柏木の磐はそんなことで微動だもしない。

『ルッター研究』来る。佐藤先生のも学究的でよい。熱も十分ある。けれども、あの公告だけはやめていただきたい。きもちがわるい。藤井先生の「読者よ減ぜよ」の方がはるかに偉大である。だれが自分独りで発行する誌に「読者よ減ぜよ」のと書けるか。一体、東西古今を通じてかくも明らかに言い切って巻頭にかかげた人があるか。ああ、藤井先生！

今日は何度にもって書いた。一日うちに居た。夕方はこの頃のならわしの如く、例の畠の道を独りで詩篇６２と独乙語讃美歌とを読みつ、口づさみつ歩いた。夕日が落ちて行く。僕にはどうも人生の夕方とこの夕日とがむすびつけられて考えられてならない。

永遠の旅路へのときはどうも朝日と考えられるべきであるのに、まだ朝日を迎えたことが少ないためか。かの夕日の方が慕わしい。それでよいのではないかしら。夕日が落ちると共に、私は死の谷へおりて行く。けれども、それは一時であって、やがてのぼる朝日でないか。否、かかる考え方は水くさい。夕日の静かに没するごとく没する。朝日は活動に燃えている。夕日は静かである。死の際に朝日の活動ではないだろう。

けれども、死は決して永遠の死でない。一時の門である。一寸した幕である。やっぱり前の考え方でよい。その幕は一夜の幕である。明朝の朝日のかくかくたるごとく、我は彼によってかくかくと甦りて来るべき国の活動に向かう。夕日はものがなしくはない。よろこびを約する静けさ、深き深きほほえみの静けさ、消え行きである。

勿論また一つの考えではサンザンたたかって、いよいよ戦勝の太陽の如く我等は逝くんである、これからが本当の戦勝それ自身である、と云う信仰もある。∵この世の戦はサンザンなればなるほどよいのである。この世で勝ったなどと思っては大まちがい。

彼女はかくしばしの眠りについた、と。

「『もう一度にっこりとお笑いなさい』と母君のおっしゃるままに、にっこり微笑ませてそのまま遂に７月３０日午後６時３０分……と。」

本当にこの夕陽の如き気がする。

僕は彼女なる人を見も知りもしない故に幸である。彼女なる人から受けたこの歌のあるものに忘るべからざるものがある。僕の女の人に、高島鴻子おば様がある。武田の叔母様がある。それきりだ。若き女の人と一人も友として見しらぬ。僕はleidenschaftlich〔情熱的〕な人間でもあるから、心の美しい女の人が居たらきっと熱烈なLiebe〔愛〕で交わることであろう。幸にして若き女の人なく、またたまたま少しはあろうとも、エホバを畏るる女でないために、信仰のないために、とうてい共に共に彼を讃美せんと近よる人はない。いずれにしろ幸である。神はあたえ給わんときに与え給わん。何をかゲーテのごとくあさることあらんや。ダンテのごとくpure〔純粋〕にありたい。アーメン。

１９２７年２月１２日（土）

快晴。

「天を指して誓うなかれ、地をさして誓うなかれ」

昨日はろくろく勉強しなかったが、決して無駄な一日でなかった。

「は神にあり、神ひとたび之をのたまえり、われ二度これをきけり」

アーメン。今日は、ミルトン、キルケゴール、学校の勉強で一日を。朝、これを記す。

全く今日は読みに読んだ。「ルッターの神観」には全く心燃やされて青線で一杯になった。アーメン、アーメン。やはり独乙には偉い学者が居る。日本の神学者は何だ。信仰がなければ駄目だ。キルケゴールは偉い、深い、ものすごい。少々不健全なところもと思わるるが、あの宗教国に居てあの戦とあの苦しみを決して読む人は忘れてならぬ。

１９２７年２月１３日（日）

晴。「空の空なる哉」のお話。ミルトン４巻終り。ヘブライ語も少しでOrthography　　　　　　　　　　　　　　〔正書法〕終る。佐藤様（横浜の）にお会いする。夜、渋谷でおそばの御馳走になる。はじめての一緒に御飯の何だか懐かしい忘れられぬ夜。中山博一様より音信あり。彼の厚き祈りをきく。有難き新町の諸兄姉よ。黙せんのみ、ああ黙せんのみ。

罪人の首。最適の字、肩がき。ああ我が肩がきは終身これ。終身罪人、とは正に自分。理屈でも論理でも何でもない。正に之!!

さて、さて。内村、藤井、塚本、畔上、佐藤諸先生よ。私はげに駄目である。もし聖旨ならば次の聖日から参上すまいと思う。ああ、我気狂えるか。然り、たしかに気狂いたり。されど、気狂いたるを知るが故に気狂えるにあらず。次の日曜行かずなどと何で言い得るか、誓い得るか。それはただ次の一事を曰わんのみ。我は駄目！　絶対に駄目！　だから彼におすがりしなければ駄目！　アーメン。

神の外すべては我が眼中になかれ。アーメン！

１９２７年２月１４日（月）

あまりなすことなかりき。ただ佐藤君に葉書を書いたが、出すことをよしてしまった。かかることは幾度となく。あるいは破った。けれども、とかく学校で変体心理的な叙情詩人を聞くから、時々、ニュヒテルン〔冷静な、正気の〕な人にかえりたい。哲学はその意味でも必要である。とにかく、イエスに単純に子供らしくおすがりすれば、それが一番ゲズンド〔健全な〕な道であり、この外に道なし。母上を武田にお迎えに行って帰る。

１９２７年２月１５日（火）

晴、南風はじめて吹き、気持がわるい位あたたかい。gesund!〔健全な！〕gesund! 本当に大きい兄さんはこの点に僕の友の友！　アーメン。

柳谷君から実に長文の手紙が来た。彼がかくまで真剣に苦しんでいるとは思わなかった。学習院の人にしては本当に珍しい。いやこんなことを云って、学習院だの附属だのとけじめをつけて官僚的に人を見ることはわるかった。

けれども、彼は自らも云う様にたしかにCathoric〔カトリック〕の色彩にかった人だ。Protestant〔プロテスタント〕をまだ知らないと云った。自らを生かし、努力することはどうしてもまだである。ああ、真剣な人よ、とうか、一切をなげすてるところまで行ってくれ。そのときに僕はどんなにうれしいだろう。ひたすら祈ります。三谷先生の『信仰の論理』をどうしても読んでもらいたい。また『聖書之研究』と藤井先生のものをいつかすこし。もう今日はやめる。

１９２７年２月１６日（水）

晴。何をせしか。昨日はやっと長い長い宿題のレナウの任を果たした。勉強、勉強。

柳谷武夫君を訪う。３年の紅露氏〔紅露文平？〕居られた。相変わらずよくしゃべるが、いやみのない快活な人だ。柳谷君もやざなところはない人だ。彼は長文の書翰をくれたのだ。とにかくよき友である。他の友とはちがう。彼はどうしても貴族タイプだ。カトリック的だ。それが僕と全く反するところである。キチョーメンな性……、色々書いて来た。もうひまがないからやめる。

１９２７年２月１７日（木）

晴。ユンケル氏に遭う。と云うのは、お茶の水で降りようとした時「シュムッツヒ」schmutzig〔不潔な〕と云う言が一寸耳に入った。すると団君がその声の独乙人の側に居る。オヤッと思った。やがて降りて見ると、団君と一緒の独乙人だ。誰だか分らぬが、Junkelさんじゃないかと一寸思った。ヘタな独乙語を一寸しゃべって見た。甚だおぼつかない。どうも赤面である。やがてお茶の水の裏まで来て、Auf Wiedersehen〔また会う日まで〕でお別れする。“sehr schönes Deutsch”〔非常に美しいドイツ語〕と云われた。恐縮の至りである。

さて、今日は馬鹿を見た。「キルケゴール」の伝記があったので買いたかったが３０銭。どうも思うより高いのでやめ。レナウをさがせば少しもなく、とうとう学校～お茶の水～神田～九段～牛込見付と歩いてしまった。大へたばり。

晩御飯たべてうんざり。勉強は９時から。グリンメルスハウゼンの「ジンプリチシムス」〔阿呆物語。冒険者ジンプリチシムス〕を買う。ミルトンのコーマスの註を古本で買う。向山堂で、インテリジェンサーの１年分を払う。それだけ。

ああ、乱れたり、乱れたり。この乱れの糸をだれがなおす。辰雄よ辰雄よ、と云う声がする。みゆるしなくば亡ぶべきこの身。

芳賀は僕のノートを借りて代書人にうつさせたそうである。どうもおそれ入った。そんな位ならもっとしっかりした人のを借りればよいのに。且つは貴族的なのに驚き、且つは自分の不勉強であったのをわびる。

１９２７年２月１８日（金）

丸善でLenaus Werke〔レナウ作品集〕を買う。彼は全く何が不幸であり、何が人生でないかを教えてくれた。彼は情に敗けた。彼は空の空なる哉のみで終った。彼は気狂いになった。僕の如きは、かくの如き人を以ていましめられるところ多い。彼は正に不信、懐疑の典型であり、不健康（生活における）の好模範である。

Goethe〔ゲーテ〕はこれとはちがうが、偉大であるが、やはり人生を哲理的に教えてくれた人間。論文をLenauについて書かんと（Lyrik〔叙情詩〕）思うけれども、何さま今までの勉強が不足なため駄目である。ああこの一年は……〔ヘブライ語省略〕……であった。来学年もしかるか。心せよ。否、心しても駄目。ただ信頼の外に道なし。けれどもここ半月の大奮闘である。ああ、無謀も絶頂である。独文科のりとやら。来らば来たれ、何でも来たれ。すべては彼により見事にきりぬけて見せる。

Gott hilfe mir! Amen!〔神よ我を助け給え！　アーメン！〕

１９２７年２月１９日（土）

曇。青木の連中の心の汚きに、我利々々なるに失望する。かつて大きい兄さんが預言して居ったことはすべて事実となってあらわれている。げに彼は鋭き眼と心とを有していた。そしてその力は今僕に与えられつつある。げに神によらで我何もなし得ず。

９時！　例のごとく戸外に出で暗夜に祈る。神様はすべてを御存じで、すべてをゆるして下さった。神様は今晩、僕と徹夜して下さると云われた。僕はよろこんでつきしたがう。げに、“du sollst”〔汝すべし〕は義務観念の声でなくして、力ある父の御声であった。

天の兄よ！　天の兄よ！　静かな夜、眠られぬ夜、兄は全く僕と一緒にこの室に居る。天のまま様よ、天のまま様よ！　寂かな夜、独りの二階にやっぱり一緒に居られる、僕のわきに。有難うございました、有難うございました。僕はかくていつまでも、いつまでも。

エス様とお父様とみたまによって歩みましょう。そこにのみそこにのみ、僕の人生はあり、僕の讃美は溢る。何がなくとも、彼ませば、僕何をかおそれ、何をかかこちましょう。外はいかなる嵐がたけるとも、内は静かな平安な春の相、これげに常春の予兆。地上の生涯はただ天上への、それの序曲たるのみ。ああ、なつかしきかな天国は。ああ、慕わしきかな、彼再び来り給う時は。アーメン。午前２時４０分。

１９２７年２月２０日（日）

晴。新町へ行く。……〔ヘブライ語省略〕……。Tief ist der Schmerz. Mehr groß ist die Hoffnung, Vertrauen auf Gott.〔苦痛は深い。神に信頼する、希望はいよいよ大きい。〕

中巻『楽園喪失』を藤井先生にいただく。有難き極み。中山、野中、佐藤、井浪、小池の５人藤井先生のお二階でミルトンとヘブライ語とを午後いつもの様に主によりて教えていただいた。こんな有難き事はない。

夜１２時からいよいよWork-day〔平日〕のがんばりに入る。試験前にも聖日は聖日である。このことは大切なことであって、歩むの心地ありてはじめて意義がある。試験はたとえ失敗しても、歩むことは目に見えざることの故に更に大なることである。

１９２７年２月２１日（月）

曇、雲。大山と云う大学院の人物が厭になった。彼は人をサグル人間である。僕はどこまでも質問に応じて答えるのみであった。僕は彼に、逆に色々問いかえしてやろうと思ったが、紳士らしからずと思って黙っていた。彼はげにズルイ眼を有す。彼は僕が今まで思っていた、ある悪い方面の人間であることを知った。最早彼にはよくよくのことあらずば口をして居ようと思う。

ヘブライ語を一緒にやっているこの大山、あの仏文の男、皆いやな変な奴ばかりだ。やはり世は敵である。ときに口を緘して黙々たるを要す。彼等は宗教の説明をとわんとす。けれども、宗教は、基督教は、主イエスはどんな人かと人に問うてわからない。彼の悪辣なさぐりに怒らんと思ったがまぁまぁと思ってこらえた。げに、主の云い給いし如く、預言者の思いし如く、だまって神に依りたのむより外ない。これは論理ではない。生活そのものである。詩６２の５は全く僕の言となった。

「わがたましひよ默してただ神をまて そはわがのぞみは神よりいづ」（詩篇62･5）〔ヘブライ語〕

天のお父様、色々ないやな経験で私をおためし下さいますこと、みこころならば有難く受けるのでございます。どうか、いつもいつもあなたを忘れ奉ることなく、真剣に謙遜に歩ませて下さい。私、自ら戦うことが出来ません。あなたに戦っていただき、あなたにあだを返していただきます。すべてあなたがよく裁いて下さいます。どうか、人の怒を怒とすることなく、神の聖なる怒を怒としてしのんで行くことをお教え下さい。宗教とかキリストとか何とか口にするさえいやであります。どうか、ただ人生が本当にあなたによってのみあること、主によって救われたことを静かに深く心に秘めて黙って歩ませて下さい。人々と口論するにまさる愚は、我々あなたにたよる人にないのであります。どうかつまらぬ議論をやめさせて下さい。兄上の如く、兄上の如く。アーメン。主の御前に先頃の罪をおゆるし下されん様おねがい申し上げます。貴き御名により、アーメン。

１９２７年２月２２日（火）

兄上の日。人間がどれほど罪のであるか。人格と云うものがどれほど信じ得られぬものなるか。友と云うものがどれほどつまらぬものであるか。ああ、その汚れ、これを毎日々々見せられ、体験せしめられるのである。勿論、自分がその一人である。けれども文学生の何人が真剣にこの事を考えているか。リーベ！リーベ！と云う独乙文学の教授、学生、そもそも何を生きているか。いかに歩いているか。ああ！　私は本当に思う。

「彼は侮られて人に棄てられ」

た人になりたいと。この世に於てみとめられ、ちやほやされるほどあやまれることはない。僕は福音を正しく体せんと思う。けれども、カーライルの如く、キルケゴールの如く、ときに火の如く聖憤に燃えてよいと思う。それはただしあまり口外してはならぬ。ただ黙って、世を憎み、世をにらんでいればよい。けれどもこの憎み、このみは言い難き愛の故にのみその価値、生命を有するものである。ただの睨みではない。

ああ神よ、どこまでも内に外に戦わして下さい。

ああ神よ、どこまでも内に外に深き愛の歩みをさせて下さい。アーメン。

おお基督教の義と愛、信と望と愛とは如何に深きかな。げに宇宙にこれにまして美なるもの、深なるもの、生命なるものはない。アーメン。

何人の友にノートを貸したか。まるで人のためにノートをとっている様である。まだ４枚もどってこない。勿論、僕はそんなことを苦よ々々言うのではない。問題になっていない。彼等つかうべくは使うがよい。それでトクしたと思うやつは思うがよい。ただ汝は

「既にその報を得たり」「はかられたり」

であって生命の其処になきこと、亡びが汝等をまって居ることはたしかである。僕はノートを厭な顔をして貸しはしない。本当にその人々は気の毒な心の人と思って愛を以て貸す。けれども、誰か──ことはいたって小さいけれども──僕の心のにあるかを知ろうか。ただ天の神が知り給い、彼のみたまにより導かれて「よし！」となし給うところをなしたときに、僕は全く自由であり生命であり、何等人々の如きは眼中に全くないのである。事は小であるが、たましいのことは大小にかかわらず真剣であらねばならぬ。

げに人の眼にはおろか、お人よしでもなんでもよい。事ありてか、汝はおどろくだろう、

「棄てられたる石はのとなる」

ことを見て。

神よ、願わくは、私の眼をあなたにのみ向けて、まっすぐに歩ませて下さい。貴き御名により、アーメン。

ただ柳谷君のみはとにかく真剣に歩んでいる。ただ彼がもっと人生に即してくれる事を。

１９２７年２月２３日（水）

如何に我は駄目な人間であるか。如何にこの一年は醜態をきわめたるか。人の想像し能わざるところである。来るべき年（学年）にまたかくかくの愚なすか。ああ、たのむべからざるものとて自分の能力の如きはない。

神よ、すべてを打ち砕いて下さい、僕の中にあるすべてを。悔改の日々、ついに生涯悔改なるこの身を知る。それでも救はたしかである。何たる奇蹟ぞや。神のなし給うことを信じあたわざる人々は呪われたる哉。

凡そこの世に三種の人間が居る。

第一、信仰なく自己の知能すべてによって全く人本位によりて一生をおくらんとする人。学者連はとして然り！である。

第二、所謂信仰ありとなし、神ありとなし、基督者なりとなして、基督教を害し、あやまりつつ一生をおくる信者の輩、之である。教会信者、として然り！

第三、全く本体を神に置き、神本位にして人の側に於て何ら生かすべき、価ある何ものもみとめざる信頼の一途に人生を歩まんとする人々である。

第一の人は、第二の人を以て第三の人を誤解している。故に第三の人は全く殆ど全く世にその真価を、存在をみとめられて居らぬ。第三の人はげにこの世にて最もあわれな、最も不幸な人間である。

けれども、第三の人は自らこの世にてあわれを知るだけ、永遠と云うことに於て超絶的たしかさと信頼と希望と感謝とをもって、人の思いにすぐる平安に歩んでいる。げに彼には本当の敵は一人もなく、絶望の事は一つもなく（勿論彼はなやみを人より、第一第二の人より、より深く知っている）かくの如き人々こそ人生の何たるかを知りたる人である。

第一の人はくるしみもだえて努力精進している。けれども、真になやむことをまだ知らぬ。真になやむときに全く自らがいやになり、全く自己放棄となり、神信仰となる。そしてそれは決して一時のがれの救われでないのである。それを一時のがれの安価な救と思っているうちはまだまだである。ああ、のろわれたる人の世なる哉！

試験が近くなってもこの問題に頭をなやまさざるを得ない。∵あまりに毎日僕はその惨状を見せつけられているからである。僕はSpiritualist〔唯心論者〕として立ちたい。全くそうなりたい。独乙文学も何も僕の終生の事業となすに足りない。そんなことはやって居られぬ。文学もよかろう。本当に何であるかをきわめるは大事業である。けれども僕には僕の使命ありて立たしめられるだろう。僕はそれが何であるか、いつくるかを全く知らない。ただ、今はしっかりと勉強すべきのものを勉強するにある。

１９２７年２月２４日（木）

イスラエル宗教史終る。今日の講義は熱があって面白かった。バプテスマのヨハネとキリスト。ヨハネの使命、その痛ましき死。キリストの立ち給う御姿。審判と犠牲、罪のあがない。げにその身を審判より犠牲の踏台とせられて、棄てたまいて罪のあがないをなし給えること。ああ、ペンはまたかのエレミヤのときの如く今日はとまって、ひたすら講義をうかがった。否、大いに考えさせられた。

政美と辰雄。勿論、ヨハネとキリストではない。けれども、彼の死は、げにヨハネの死がキリストを打ちたる以上に──ヨハネの死なくともキリストはキリストであり給うたが故に──政美兄上の死は辰雄に必要であった。これあだかも自らのために兄上が死したりと云うが如くなれども、勿論そういうわけでなく、政美兄上の死はその一つの要素として辰雄の救へであったこと絶対に拒むわけにいかず。その政美をもちたる辰雄はいつまでかくてあるべきや。

おお、神様、お父様、どうかしっかりしっかり立たせて、戦わせて下さい。我は前を前を望んで勇み立ちます。いかなる険しき坂が我が前途にありましょうとも、あなたに信頼しておわりまでおわりまで貫き通させて下さい。貴き御名により、アーメン、アーメン。

来るべき大学第２学年には、ヘブライ語をしっかり、ギリシヤ語をしっかり、ラテン語をすこし。独乙語、英語は勿論うんと。げに多事なる哉！

創世記第１章終る。感謝。学校では原典批判だが、家では信仰の立場から。この両者は相容れぬものがあるが、私は平気である。∵立場をことにするから。聖書を健全なる信仰を以て読むべきは勿論なり。第１学年の事業は今日で終る。あとは試験。

１９２７年２月２５日（金）

晴。汝帰りて静かに信頼せよ。げにルッターのあの苦しみ──文人等が恋愛になやむのと全く異なる──罪の苦しみを宗教家の特別なものと思うは誰であるか。あやまれる世なる哉。万人のまず苦しむべき最大の問題はこれである。ああ、我悩める人なる哉、あわれな自身の姿は、顧みるだにゾッとするのである。聖霊よ、来り給え。アーメン。

雨が降っている。静かな静かな夜である。本当に今更の様に郊外の有難さを感ずる。大きい兄さんが居られたらと思う。弱き人の心を拒否することは出来ない。人生のある寂しみを拒むは鬼である。けれどもかのいたずらに泣くセンティメンタリストではない。燃ゆる信仰の火があって、希望の中にすべてが肯定される。

今日は「預言者とは何ぞや」を書くために一日をついやす。小論文である。立場は勿論信仰的である。あるいは石橋先生には気に入らぬかも知れぬがやむを得ない。僕には聖書はかく読まれ、かく解せられる。

１９２７年２月２６日（土）

とうとう「世界文学全集」は断念した。一つはお金がつづきそうもないのと、一つはツムジマガリで、不信者が主たる原因である。あんまり多くの人々が買うし、ろくな評がないのや、何やかやで一時気がさした。カッテニシヤガレ！と云う気持である。今にホメールをギリシヤ語で読んでみせるぞ。ミゼラブルを仏語でよんでやるぞ。ミルトンは今読みつつある。ダンテをイタリヤ語で読んでやるぞ。ゲーテは勿論独乙語で。何ぞホンヤクを要せんや。

「明治文学全集」もいや気がさした。今月は滞納だ。それでもこれは出さねばなるまい。どうせ母上が出して下さる。……ああこれはデーモン（Dämon〔悪魔〕）の心である。しかし、僕は文才が、常識が足りないと云うので読めと云われたのだから全くお義理で、何ぞそんなものを真面目によんで居られるか。

それはそれで、母上の愛の御心は飽くまで真面目にうけねばならぬ。僕はとくに母上を愛す。母上とは信仰上、性格上、大分異なる。それでも母上は最愛の人である。それは単に母なるの理由からではない。深きものがある。今述べんと思わぬ。１２時がすぎた。お祈りして寝よう。

今日は藤井先生の「人生の歌」を２時間、母上に読みきかせた。その外、論文のため一日をついやし、未だ完全せず。困る。しかし万事何ぞおそれん。主守り給う。悔ゆべきを悔い、むべきを希んで行く所の全く彼故の人生である。我はサンザンでよい。ただ彼を仰げば足りる。大学第１年はサンザンだった。否、今までの２３年の生涯がサンザンだった。これからもサンザンだろう。ただそのサンザンが内容的に質的に異なって行ってほしい。そのことのみを願いて勇敢に──あとを忘れていさぎよくいき進まん哉。

一日として政美兄上を、高島のおば様を思わずしてすごす日なし。今日も大いに教えられるところあり、涙なきあたわず。それにしても、かの佐伯と云う人、喜代ちゃん、君代さんのために。前者はげに特別の特別の御恩寵ありて立ち帰らんことを。後者のためには本当に弱き女のこと故、いつまでもいつまでも、主の強きお手のあらんことを。アーメン。

１９２７年２月２７日（日）

伝道の書、第３回であった。本当に先生によって伝道の書がかかるものであることをはっきりせしめられた。書かんとは思わず、ここには。ああ、ああ、何だか今日はもう嘆息するより程知らぬ。暗き日よ、されど深き深き日よ。ああ、ああ。アーメン。

１９２７年２月２８日（月）

エラバレタル辰雄よ、どうかしっかり歩んでくれ。アーメン。

柳谷武夫君より９枚の書翰また来る。僕３時間に亘りて１３枚の書翰を書く。徹底的に信仰を告白す。まだ勿論言いたりない。彼の本当に重荷をおろされた信仰に入らんことを。

１９２７年３月１日（火）

晴。終日在宅、試験勉強。実に今年ほどのんきにかまえたことはない。どうしてこうなのだかわからない。だまるがよい。

天のお父様、兄上、すべて我をしむ方々よ、我を叱りたまえ、責め給え。

我はただまんのみ。ああ、サンザンなる哉、サンザンなる哉。サンザンをついにどこまで、すべてはわからなくなった。けれども絶望でない。絶大の希望である。天を指さんかな。アーメン。

１９２７年３月２日（水）

晴。我、受くべきものを受けたり。神に感謝す。神に悔ゆ。我、歩むべき道にしがみつかんとす。たすけ給え。アーメン。

Was ich nehmen soll, habe ich genommen.〔我は受くべきものを受けたり〕

「はかられたり、はかられたり。数えられたり」

げに、今、世界で最もあわれな人間は僕である。何となれば、汝がおこたりしことはことごとに、はかられて居るみじめにあるからである。学校の試験が思う様に行かぬから悲しいのでない。汝が神の前にしっかり歩まなかったが故にかなしい。汝が神におすがりしなかったが故に悲しい。けれども、受くべきは受ける。人生は失敗や成功の果に於てない。どこまでも心の状態に於てある。純に、純に、私は悔ゆる。また純に純に私はのぞむ。私はたしかに涙を心の中でながす。けれども私はそれ以上に希望の祈りを捧げている。

神様よ、いつもいつも私を捉えて下さって有難うございます。どうかどうか、離れたる羊をたち帰らしめ給え。アーメン。

すでに知る、大学第２年は重大であることを。

すでに知る、大学第２年は真剣勝負であることを。

されど知る、私は決してちがうこと能わざるを。

さらに知る、私はただ彼に信頼し奉って歩むのみと。

誠に知る、私は希望と愛と信頼に生くるのみなるを。

これぞ我が野心なれ。そのほかに我がのぞむものなし。

夜７時２０分の汽車で東京発、渡欧の寺井さんを送る。人望があるのであろう。多数の本校の生徒が送りに来ていた。先生！先生！で大変である。さすがは女子で涙ぐむ人が居た。万歳！と云って送ったのは男の連中であった。神共に在ませ、と口の中で祈ったのは僕であった。げにあの涙もろい、情に厚い女子が信仰によって信仰の目を以て見送ったら、どんなに美わしいだろう。そこに情と信と、これなくして女の美もまたはかなきものである。つくづく女子教育の半面を教えられた。

中野まで顔をおさえていた一人の生徒が気の毒であった。僕も情の人である故に、もし彼女に話しかけることが無礼でなく、彼女をおどろかせぬことであるならば──僕の単純な心は正にそれをなさんほどに動いていた。自分の単純本当に信仰に燃えるとき、かの男女間の所謂礼儀も越えてしまいそうに──僕は彼女に問うところであったろう。何だか言い難く彼女が可愛そうだった。彼女が信仰ある人ならと祈った。それにしても寺井先生は人格者であったが故にあの多くの女生徒の見送りがあったことと信ず。僕はrein〔純粋〕な心持で書く。どこまでも僕は嘲笑的気分が、イロニーの心持が大嫌いである。

夜、美しくも美しくも星がこぼれるほど。静かに厚き祈りを捧げる。かつて東京駅へ政美兄上を見送ったときのことを思い出して、そぞろに涙禁じ難きものがあった。げに、神共にまた会う日まで寺井さんと共にあらんことを。

試験勉強は殆ど出来ず。よしよし。Work while you work!〔働く間は働け！〕である。

１９２７年３月３日（木）

かよわきわれは　おきてにたえず

もゆる心も　たぎつなみだも

つみを贖う　ちからはあらず。

アーメン、アーメン。

星を仰ぎに　みわざをたたえに

お父に　祈りまつらんために

いつもの如く　外に出る。

無限に悲となる、無限に泣きたくなる。

無限に地に伏したくなる。

我が身よ千々に砕けよと言いたくなる。本当に本当に。

そしてそれもついに４４６の２番のとおり。

仰ぐ！　仰いだ！　仰ぐのみ！

父は僕に絶望し給うた。僕が絶望するより先に、またより深く深く。

我がために、否、父自らの故に、

我が不義の故に、父自らの義の故に、

我を愛し給うの故に、父自らの愛のどれほど不義と相容れざるかの故に。

父は、おお父は、キリスト、み子を十字架につけ給うた。

彼のあの故に、我が罪は雪よりも白くぬぐわれたのを仰いだ。

その星の光はそれを教える如く、純に、聖に、厳に、愛に輝いていた。

正にその故に、その故に、僕の涙はぬぐわれた。

もしあのゴルゴタの十字架なかりせば、

僕は今晩、気狂になって中央線の鉄道に飛び込んだかも知れぬ。

げに己れをみること深きにつれて、我が気はとおくなり、

わが足は鉄道に向かってよろめいた。

されど見よ、天上に声あり、光あり、曰く、

「汝の罪ゆるされたり」と。

ああ神の言、父の言！　この言を拒むものは誰であるか。

おお、その傲慢よ、不遜よ、汝はまだ自らの力に頼らんとするか。

ああ、おそろしきこと、原罪の罪とてかくの如きはない。

ああそうだ、そうだ。信頼！　信頼。

藤井先生の云わるるあの信頼、信頼。アーメン、アーメン。

オリオン、大犬、小犬座を仰ぎみて、昔をおもい、天の兄を思う。

らざる友！　聖なる聖手のわざなる星よ！　いつまでも導いてくれ。

汝は我が永久の伴侶、父のみもとに行きつきてさえ。

１９２７年３月３日夜、武蔵野の一角、星の光かくれたるかなしき夜、一人二階にて。

「はにる 其はにを帶るなれば心もにむかへばなり」（伝道の書7･3）

「かれは侮られて人にすてられ の人にしてをしれり また面をおほひて避ることをせらるる者のごとく侮られたり われらも彼をたふとまざりき」（イザヤ53･3）

「ああ我わがを水となし我目を涙の泉となすことをえんものを我民のの殺されたる者の爲に晝夜かん」（エレミヤ記9･1）

「ああ神よねがはくはなんぢのによりて我をあはれみ なんぢののおほきによりてわがもろもろのをけしたまへ」（詩篇51･1）

「神のもとめたまふはくだけたるなり 神よなんぢは碎けたる悔しこころをしめたまふまじ」（詩篇51･17）

「わが神わが神なんぞ我をすてたまふや 何なれば遠くはなれて我をすくはず わが歎きのこゑをきき給はざるか」（詩篇22･1）

「そのはただしばしにてそのはいのちとともにながし 夜はよもすがらかなしむとも朝にはよろこびうたはん」（詩篇30･5）

アーメン、アーメン、アーメン。〔註：これらの引用聖句は赤色ペンで記されている〕

１９２７年３月４日（金）

曇、雪、晴。終日、家に居る。勉強。「人生の歌」は読んで、先生に叱られ責められいましめられる心地がした。そうだそうだ、本当に先生にはsublime〔荘厳な、気高い〕なものがある。これが到底普通の牧師と云う人にはない。先生にしてはじめてこの香りがある。これが読めねば「人生の歌」をよんだと云われぬ。そして僕達、先生の直弟子たる者、かくあらねば何を以てか先生に答え得んや。アーメン。

「アルバース氏は藤井先生の著を読んで『バッハの音楽よりもたのしい』と評されたときく」

と佐藤勲君から云ってくる。外国人も日本人の偉大なる人をかく見てくれる様になったことを思ってうれしくある。いつかグンデルト先生にも見せたいものである。

「誰一人知らずとも彼と共にしずかに黙りながら十字架を負うて終らん」

とは彼と僕の祈りである。今更の如く知る、如何に我が兄は深かりしかを。

１９２７年３月５日（土）

雪の朝。３月になって雪が降る。面白い雪。面白い冬。春が来て冬が来る。昨年の７日がやはり雪の朝であったことを忘れもせぬ。藤井先生へ行き出してから丁度１ヶ年になる。かわらざるは我が身の汚さ。ああ、ああ、と嘆息する外なし。本当に駄目だと云うことが何より僕に適切な言葉である。大なる霊性と大なる獣性。いつもこの二大流の何れへかと迷いつつ。否、霊性の流れに浸りつつ獣性におちいる、なやめる人なるかなである。

けれども、きっと来る。それはきっとくる。政美兄上の如く立つ日は。苦しまんかな、偉大に。人生はこの苦しみを苦しみて、歩み行くにのみある。

日記をつけること４１２０頁。しかもはじめと異なるところは何ぞ。人間のいかに無力なるかを知らしめらるると共に、神の力に頼まざるべからざること、それなくば死！なることを益々深く知らしめらるるが人生である。

「罪のいやますところ恩寵もいやます」

のである。アーメン。

自らの駄目、この駄目、地獄は汝の分なり。黙せんと云うもの何故書かんとするか。ああ、黙せん忍ばん歩まんと云うものの何故揺り動くか。己が生命を棄てよ！　アーメン。

今晩は徹夜である。人生は竟に論理でない。超論理の中に深き真理、生ける真理あり。神よ！　御前に罪を犯せるこの身、ゆるし給え。助け給え。イザヤ40･28～31、アーメン！

「28汝しらざるか聞ざるかヱホバはとこしへの神地のはての創造者にして倦たまふことなく また疲れたまふことなく そのこと測りがたし 29疲れたるものには力をあたへなきものには強きをまし加へたまふ 30年きものもつかれてうみんなるものも衰へおとろふ 31然はあれどヱホバを望むものは新なる力をえん また鷲のごとく翼をはりてのぼらん 走れどもつかれず歩めどもざるべし」（イザヤ40･28～31）

１９２７年３月６日（日）

雪の朝。去年は３月７日が雪の朝であった。忘れもせぬ。初めて先生のもとにうかがい、『聖書の結婚観』をいただいた日である。１年すぎた。感謝のみである。けれども自らを顧みて、ただまた懺悔あるのみである。かくも私は矛盾している。永久に矛盾である。そうである。基督者はそうである。けれどもまた、ブラウニングが歌った様に、いつか円くなる、弧はいつか完全になる。この希望も大なるものの一つである。

今朝、佐藤君のところへはやく行き、共に散歩に出る。丘に出た。畠か田か眼前にひろがっている。昔、兄上とこの辺へ来たことを思い出す。春！　春！　春！である。うららかな朝である。すべてがMorgen Gebet〔朝の祈り〕である。

突如として僕たちのコースの前面に現われた人がある。である。何処の牧人か。それはヘブライのへの牧人である。よくも日本へ来て、また何千年も生きて居られたものである。我が眼は躍った。牧人、！　彼は古色たるソフトをかぶって居られる。彼は太い棒を本当に文字とおりのStick〔ステッキ〕を手にして重々しくついて来られる。彼の足駄はぬかるみの如きどろで一杯でゴロゴロしている。彼は一歩一歩ふみしめて歩いて居られる。僕達のあとをついて来た。犬が二匹、彼のところへ行ってじゃれた。二人はお辞儀をした。「いいお天気でございますね」と、僕は牧者に言いかけた。「然り！」と云う意味の返事をされた。わかれた。牧人は独り天を仰ぎ地を踏みしめて黙々として去った。しばらくして二人はふりかえった。彼ははるか丘の中程の芝か草の上に腰をおろされた。祈られたこと勿論であろう。天を仰ぎ地の草木をながめ、牧人はひたすら父を友として居られたろう。

牧人は誰あろう、藤井先生その人である。この印象を私は永久にわすれ得ずと、友に夜の書翰に書きおくった。

新町はat Home〔自分の家〕である。お昼は佐藤君と中江君と３人でおもちを食べた。先生の雑誌発送をした。柳谷君のうちへ行く。ノートをとりに。彼帰り来らず、待つこと２時間。ようやく来る。日はくれたり、夕飯を共にす。２時間弱ほど話して帰る。〇〇〔英語〕なるをまぬがれず。彼が本当の意味における──敢えて言う柏木もの新町ものの──基督者となられんことを、かなわずとも祈りにする。

今日はコーヘレスのお話の第４回目であった。

三弦さんが今日来られたと。失礼した。やむを得ず。ねがう、彼等従兄弟が真に救の道に来らんことを。それは殆ど可能性なきことである。ああ！

政美兄上は独りで歩んで独りで行った。辰雄も独りで歩んで独りで行こう。父よ、十字架の道をいつまでも、アーメン。

１９２７年３月７日（月）

去年の今日、新町へはじめて。石橋先生への論文、今日郵送す。１１枚、２２頁の小論文「預言者とは何ぞや」。かなり信仰的なものが出来上がり、学的でなかった。已むを得ぬ、まだ勉強が足りないから。とにかく、今年はすべてをうける。これ受くべき当然の杯である。ただ私の生涯は外的結果の如何にない。いつも希望と真剣な心に生きんにある。

春が来た、春が来た。と歌いたい一日であった。青芽がふきだした。さてこの１週間は大変だ。神よ、ガンバラしめ給え。

１９２７年３月８日（火）

試験、普通。自由な勉強の日ぞまたるる。雨の夜。すべて略す。

叔母様、勲君に書翰。ただあの関西山陰地方の地震に心痛む。気の毒な人々をよそにしてのんきに飲みくいして居られるか！

１９２７年３月９日（水）

悪筆の自分にあきれる。どうも漢字は僕の性にあわぬ。横文字が、日本の平仮名がある。なにしろ直線でゴツゴツ書くのは手に手の運動と相反している。手を動かせば、それは必ず孤形であるところからみても、また上から下よりも、左から右へ横に曲がって書く方が自然である。支那人は不自然だ。西洋人の方がこの点は自然だ。ところでヘブライの人々に至ってはあきれた。横に書くは賛成だが、右から左へにはおそれ入った。丁度おっかける様な書き方だ。そしてあの断片的な文字にもおそれ入る。がどうしたものか、ヘブライ文字は見ると気が生々する。いい文字だ。書くと更によい気持だ。さて、自分の主義にしたがい横書きとする。

如何なれば我はかくあわれな人間か、罪そのものか。何度悔いても改まらぬこの身。それでもよいと云う声がいつもするのが不思議である。ああ僕の筆は例のironisch〔皮肉の〕に堕したか。いや、例のと云うのは「自分のかつての」と云う意味ではなくてして、世界一般にある現代青年の好む、の意である。僕は時代にう人間であるから、つむじまがりだから、彼等のまねはしたくない。

風が吹き荒れている。明日は試験である、と云うのに武蔵野の二階で一人大変のんきな顔をしている。午前も夢の如くすぎなんとしている。さて、Phlicht〔義務〕はしなければならぬ。Muß ist eine harte Nuß!〔“ねばならぬ”は難しい課題〕と云う諺があるが、全くそうである。はやく自由な勉強がしたい。然らず!!　自由と云うのはそういう意味でない。試験勉強の中にも自由がある、とは試験を問題とせずして与えられた課題を生かして勉強するところに自由があるとの意である。しかり。自由は主と共にあるときにどこにでもある。

思わざる　地の震いにて　泣く人よ

　　　いかなれば人は　かく試さるる。

厳粛なる人生、科学を以て竟に人生の意義を探る能わず。宗教学、哲学を以て竟に人々は解し能わず。人生は歩みてのみ、体験してのみ知らる。これ生ける詩なり、矛盾と逆理なり、超論理なり。ただ彼を仰ぐことよってのみ人生は知らる。これ信仰なり、飛躍なり、人の心に非ず、上より来る心なり。一切の解釈もこれを説明し能わず。知る人のみ知る。直観する人のみ直観す。罪に泣く人のみ知る。希望と愛と信仰に生きる人のみ知る。絶大なる詩そのものにして、また最も単純なる信頼そのものなり。

神よ、あわれみ給え。神よ、聖旨なさしめ給え。アーメン。

悪の悪、罪の罪、それが私である。すべての悪、罪は私のやったこと、なしつつあることである。私はあまりに所謂善人なる方々と同居するにふさわしくない。私は今も家出せんと思う。けれども、それがそれですめばよいか。家出しても我が罪もなおらねば、ただ家の人々に迷惑をかけるのみならず、世間を騒がすのみである。それはあまりに物ぐるおしい。それはやめる。自殺しても駄目である。私は息がつまりそうに苦しい。この罪のために、獣性のために。アダムの堕落とは実におそろしいことだ。それはアダムのことではない。アダムのことのみではない。我々自身のことでもある。リンゴを食ったアダム、イブを他人の事視する人々の心は幸と云おうか、私は到底こんなことを云っていられないのだ。

誰か僕を突然つかまえて、おまえはこれこれの罪をおかしたから牢獄へつれて行くぞと云われたときに、その罪科がどんなにおそろしいことであっても、私はとして従うだろう。囚人を指さすことは私にも出来ない。淫婦をあざけることも出来ない。詐欺師をさげすむことも出来ない。けれども一つ大切なことがある。それは私がかくも罪なるに拘らず、否かくも罪なればこそ、「来れ！」と呼ぶ声のすることである。もしこの声がなかったならば、私は今散歩してあの鉄道線路にさしかかったとき、おそらく自殺をとげたろう。それは真面目な考えである。

行きつまって断崖から落ちんとした時に支えた手があった。その御手、その御声。これがなかったならば、私は再び言う、自殺してしまったろう。気狂いになった詩人レナウは全くこの御声を聞くに自らその耳をしてしまった人だ。そしてかかる人がいかに多いか。

この御声は実は私がめるより、呼ばわるより、さがすより、苦しむより、先に先に私を要めて呼んでおられたのである。私が思うより、苦しむより深く深く苦しまれて、私をおもわれてさがしておられたのだ。しかもそれは私のため、この罪の身のためばかりではなかった。この罪のとるに足らぬ身のためより先に、もっともっと大切なためのために、そのためは神御自身の義と愛のためであった。そのために十字架にをつけ給うた。こんな大きなことが宇宙にあったことを知らしめられた私は、神御自身のための故にかくもあわれまれるのであることを知らしめられた私は、もう自分なんか御手いるのが全く痴愚にして傲慢なるを知った。神は私が絶望するより先に強く人間に絶望して十字架を！であったのだ。さればこそ我々に残されたる唯一事、全一事、総一事は、彼の十字架をあおぎ、神の聖旨を知り、神を信じて歩むにあるのみである。そこに全く自由な律法がある。Simple〔単純〕、sublime〔荘厳〕、pure〔純粋〕、love〔愛〕、strong〔強力〕、すべてはここから流れてくる。我々はそれを受けて歩めばよい。これ等は十字架から流れて来た。これらは人の頭のひねりだしたそれらとは全く香をことにしている天のである。かく天にけるものはもはや地上を歩くにも天の属を己がものとして歩んでいる。されば地上にては宿れる旅人であり、故郷は天にある。かくてはじめて地上が本当に天上、永久とつながれる本当の地上になるのだ。かりの宿りの本当の意味と価値がわいて来る。この来世の観念なくして何の地上であるか。

ああ！　神よ、神よ。有難うございました。打たれた私に今散歩している中に雨の降るのも忘れて全く恩寵にあふれ、聖国のこと、我が罪なること、十字架のことを考えさせられまして有難うございました。アーメン。

１９２７年３月１０日（木）

快晴。陸軍記念日。起床５時。サソリを南方の空に望む。祈祷。夢にて神の罰を蒙り深く感ずるところあり。十字架を負うものは其の如く歩まざるべからず。イエスの弟子と云うものは其の如く歩まざるべからず。

我、試験を超越せり。試験は我が奴隷なり、我は主たり。地上の生終るまで、我に勉強は勉強なり。

１９２７年３月１１日（金）

昨日は受くべきものを受けた。私の不徹底、不勉強、すべてこれ自分の産んだものであるが故に何とも仕方がない。私は黙する。人よ、私を利用せんとならば利用せよ。我は、レバノンの香柏をのみ慕う。この世のものを慕う心、我に失せたり。

来るべき年、学年と私は言わない。今日と云う。今日、私はなすべきことをなそう。日記はもうやめる、今日は。

１９２７年３月１２日（土）

倫理は竟に美わしき楽こそ彼岸にながめしめるのみであった。哲学は橋を架けることを教えてくれた。が、力を与えてくれなかった。が、あるものが翼をあたえて飛ばしてくれた。竟に飛躍である。竟に超論理である。自分はあくまで地を匐う虫けらである。一生かかってこのことを自覚せしめられるにすぎず。自覚とは何ぞ。曰く「虫けら！」であると。しかし竟に自らを凝視して絶望である。

私は日陰の草でよい。けれども私の頭は、草の頭は、否、眼だけは日に向かっている。かの大なる日の存在はこのあわれな草の存在の如何にかかわらず、ある。私が自らに絶望する前にもっと深く偉大なる他力が絶望してござる。一片の所感を以てこの一年を総括するに足る。

実はこんな表現ではまだ僕の心の心ではない。私はついに言う。

力と愛にまします父よ、主キリストの十字架よ。アーメン。

来れよ、春よ、復活の春よ。我が心の中も青き若葉にて萌ゆ。古き失敗はすべて流れ去りたり。新しき水よ、注ぎ来りてこの若草を育みてよ。

１９２７年３月１３日（日）

８時半、新町へ。９時半、着。佐藤君と話す。午後５時半まで新町。大雪のため電車不通。渋谷まで徒歩。井浪君と二人で。８時すこし前帰宅。。

１９２７年３月１４日（月）

晴。午前雪かき。午後、宣ちゃん４時まで。八尺、８時まで、夕食を共にす。人生観を云々する。自分は勿論、１０分の１も云いつくせず。ただ彼の人本位の美わしき思想たるにうたがいなし。神はいずれを真の人生となし給うか。体験せし人ぞ知る。確信せしめられし人ぞ知る。ああ、々としていかにかかる思想の人間の思想界と云わず広くあることなるかな！　ああ！と云うのみ。祈らんのみ！

もはや、「現代日本文学全集」をとらじと思う。第一、１頁も読んでない。こんな馬鹿なものを何故とったか。あきれてしまう。母上の御心とは云え、我は断然やめるべきであった。世界文学全集はまあとろうと思う。

１９２７年３月１５日（火）

試験終る。々第１年終る。感想多々あり。されど書くまじと思う。何となればと云うわけにもあらざれど、読みたき書いと多く、これにかじりつきたければなり。鳥籠から放たれたる小鳥の如く、我が心躍り立ちて自由なる勉強にかかる。これ我が安息なり。

書翰はだそうと思っては、思いかえして黙するにしかずと思い、やめる。こんなことは々。葉書は何枚無駄にするかわからぬ。けれどもそれでよかったのだ。「細き確かな声」に従って歩もう。キルケゴールも言ってくれた。

宣ちゃん、柳谷に書く。青木の人々は可愛そうな霊的病者のみ。人生の厳粛と、歩まざることそれ自身の大なる罰であることをしみじみと考えさせられる。ああ、呪われたる哀れなる人々のいかに多き世なる哉。この豊けき人生を詩人と共に詩２３篇をうたわざるや。

武田の叔母様に近いうちに『人生の歌』をおくろうと思う。今日は、大きい兄さんの『基督の復活』──或は藤井先生のとさえ言いたい──を偲びて、原書２冊を買った。それからギリシヤ語の文法書と。それでがまぐちは空っぽになった。お腹がすいたと訴えている。

大学へ入って随分書を買った。金は殆ど全部、書のためであった。それにしても、つまらぬ本は買うものでないとつくづく思う。

１９２７年３月１６日（水）

父上第２０年目の御命日。午前、新宿の安田銀行へ。母上を山本へ。午後、井浪君来遊。１時間もさがせりと。気の毒であった。夕、母上をお迎えに山本へ。道悪し。うんと勉強と思うが、決心や誓いはやめた。ただ信頼の日々に、大なる希望をすてて。されどこの信頼の日々の歩みの中に、実は決心以上の大なる希望がある。まて、忍べ、黙せ！

１９２７年３月１７日（木）

起床６時。午前、ヒルティー。午後、ひるね。母と散歩、４５分。夕、入浴。兄を思う。読書。『聖書之研究』整理、２０余冊欠けている。やや寒し。白のうさぎを喜美子につくってやる。

１９２７年３月１８日（金）

朝起きて、うさぎの耳も眼もおち、身体は小さくなっているので、きみちゃんは「可愛そうだねー」と云っていた。ヒルティー、むずかしい。引用をしらべているとなかなかはかどらぬ。しかしヒルティー先生は全く偉い。よく言ってくれた。“Transzendentale Hoffnung”〔超越的希望〕。復活ののぞみなくて何の人生であるか。アーメン。

父なる神は讃むべき哉。

内村先生を日本に使徒として遣わし（天より）、そこよりこの柏木の許より出だしめ給うたる、藤井先生、畔上先生、塚本先生、三谷先生の諸星、これ大ならざるか。かのクロップシュトックの旗下のハインブンドは左程ならざりしかども、我が日本のこの柏木より出でたる諸果はげに重大なる実を結ばん。その種は永久に尽きざるべし。げに主の御名を讃むるの外ぞなき。我等如何にもなれ、ただ主の御名のあがらんことを、みこころのならんことを。されば、使いたまえ、我等その幹より出でたる小さき柏木なれば。

かく思いて我が身の全く福音のため重大なる一身なるを知る。されど勿論、我自らを偉大、重大となすにあらず。自らを内村先生、藤井先生の後継者となすにあらず。若し、しか言わんか、即ち先生等は曰わん「去れよ！　行けよ！」と。然り、我等は党派、名誉のために来れるに非ず。主の御心ならんがためには、我は人にすてられ、師にすてられ、ただ路傍の一草の如き生涯をおくりてすぎ行くも願うところなり。ああ、神によしとせられんことの外、何をか要むべき。人を我問題とせざるなり。アーメン。

１９２７年３月１９日（土）

武田行。うなぎ、キャッチボール、母と帰る。夜の雨、祈りの雨。宣ちゃんへ書翰。ミルトン。祈り！　祈り！　ねる。

１９２７年３月２０日（日）

午前９時半、佐藤君のところへ行く。が降っている。雪になる。伝道之書第４章。午後ミルトンとヘブライ語。野中さん都合ありてやって来ず、僕がやることになる。不十分。何とも申し訳なし。午後８時半まで夕食も食せず、忘れて。しんみりと藤井先生のお話を伺う。いよいよ、世界第一等の書のみを読んでも死ぬまでかかることを教えられ、むだなことは出来ぬと悟る。先生に対する我々の反響は、沈黙になるほど感じ入っているのである。先生よ、願わくは、我々が如何に歩むかを見られよ。何を求めて歩むかを見られよ。我々は静かに身を以て先生にお答えしたい。いたずらなる反響はいやである。内村先生の「読者界報告」をこころよしとせざる藤井先生に、やや矛盾があった様である。けれどもこの矛盾は決して不通の矛盾でないこともよくわかっている。それ故に、神様をのみ相手としたい僕達は、やっぱり先生も神様をのみ相手とされる故に安神である。否勿論、先生は僕達より遥かに遥かに純真に神様の外眼中にない方であるから、僕達は従い得るのである。従うこと切に願うのである。１０時帰宅。就床。

１９２７年３月２１日（月）

午前、独乙語。午後、ヘブライ語。夕、井ノ頭散歩。例の石のベンチに横になって天を仰ぐ。だんだん星の光が強くなって行く。全く夜になる。人一人居ない。静かに静かに祈る。ここで祈りし兄上を憶う。池の真中の橋の上へ行く。暫く星を仰ぎて、星座も数える。鵞鳥もすべての鳥もサッキの鳴き声をしずめて眠って居る如くある。池心に金星がやどる。Great star!〔偉大なる星よ！〕と心の中に叫ぶ。イエスが静かな夕、静かなあさまだきを愛された御心を幾分なりとも伺い得て感謝であった。

吉祥寺駅へ来る。駅夫の仕事を見る。本当に彼等はかくして忙しく日々を終るかと思うと、自分の如き一体これでよいかと、いたく苦しむ。勉強を猛烈にしなければならぬと教えられる。帰る。カーライルHero-Worship 〔英雄崇拝論〕を読む。なぜ僕はこんなに書を読まないでボヤボヤしていたのだろうとつくづく思う。大学３年ではいよいよたりないことを教えられる。すべてはしかしよかった。ただ主の故に。主にとらえられたるを感ぜしの故に。その故に何をしなくとも高校４年はミジメながら、僕に最善であった。すべて恩寵となった。アーメン。

１９２７年３月２２日（火）

兄の日。ヒルティー先生。午後、斎藤さん来らる。夜、石橋先生へ行く。１時間半ほどお話を承る。先生が信仰の人なら、と思った。しかしヘブライ語に於て我が師である。AMOSの研究とDie Poesie des alten Testaments v. E.König〔ケーニッヒの旧約聖書の詩〕をお借りする。この休みは実に試験中より忙しい様な気がする。けれども実際こんな嬉しいことはない。（２３日朝書く）

１９２７年３月２３日（水）

晴。昨日は風が吹いたが、今日は風のないいい日らしい。私はつくづく思わせられている、十字架を負うの生涯を。これは毎日、じっくりと静思しなければならぬ。けれども見よ、十字架は、実はエス様がついも後から大きな御手で自ら負ってしまっていてくださることを知ることを。ああ、いかなる驚くべき恩寵であるか！　このことがわかって、もう私はいつ死んでもちっとも惜しくない。すべては彼故に！　すべては彼の御名の故に！　讃美すべきかな深く深く、我が神、父、主を。

午後１時半、出掛ける。南下、立教女学校の前に出る。玉川上水に出る。渡橋、上高井戸駅に来る。更に南下。やがて小川に沿える道に出る。可愛い家鴨５羽が面白そうに浮いている。暫しうちながむ。やがて道をまちがえて、終に世田谷の辺に来る。三軒茶屋、新町、野中様、眠る。先生、Tsu先生と散歩。お留守。伊藤さん、順子様が書斎で勉強して居られるのがチョット見える。おば様に御挨拶。帰宅、８時近し。夕飯、こたつ。お風呂。寝る。合計４里余り歩いてヘバル。写真をとりたいところもなかった。「宗教と文学」を半分よみしのみ。午前はカーライル。

１９２７年３月２４日（木）

終日在宅、書斎。夜、星の下でいつもの如く祈る。我が唯一つのなぐさみなり。星のかなたにいますお父様、宇宙を御手に握り給うお父様！　人生はかく厳粛なりと告げ給う。すべてをお父にゆだねて参りたきのみを告げ上げる。主エス様の故にすべてよきをさとし給う。有難き極みに我が心は満ちあふる。つらくも豊かなる豊かなる人生をお父様からしらしめられて何より有難く、たしかである。

１９２７年３月２５日（金）

忘る。

１９２７年３月２６日（土）

雨。かくべつなし。

１９２７年３月２７（日）

晴。藤井先生。午後、花買い。帰る。夕飯。なし。

１９２７年３月２８日（月）

快晴。午前１０時出発、新宿へ行く。百合なし。大曲へ行く。あった。嬉しい。２本、１０輪ついたのを。３円。新町へいそぐ。あげる。田の方へ出て祈る。１２時半からお手伝い。御案内役。１時２０分、式〔中山博一兄と常子姉の結婚式〕がはじまる。

先生に向かって右側に新郎、新郎側家族、親戚、友人（植木さん、野中さん、僕）。左側に新婦、新婦側家族、親戚。合計２０名。聖書朗読、創世記1･1、1･27、2･18～24。エペソ5･22～33が読まれた。「聖書により結婚とは何ぞや」のお話。新家庭に対しお祈り。竟に神讃美、神の栄光のため。５時までに新宿の宝亭。５時につく。伊藤玉江様と野中さんと僕は歩いて。僕は全く飛入りの様。恐縮に存ずる。中山様は、政美さんの代理なりと。野中さんは、政美さんの続きなりと。何とも恐縮である。トランクを忘れる。僕がもうすこし気をきかせればよかったにと思い、全く申し訳なしと思う。自動車でとりに行く。７時ちかくに帰る。先生のお話中、食事はすむ。独りで食べる、うかがいながら。

信仰！　信仰！　今日は終りまで信仰のお話である。終りまで神御自身が導いて下さった。げに理想的の式であった。願わくは限りなく御恩寵のお二人の上にあらんことを。野中様の友人代表の話あり。植木さんの秋本様よりの書翰、祝辞の代読あり。親戚の方の話あり、中山様のお父様のお話あり。閉会、８時半。自動車来る。鎌倉へ帰らる。中山様の父君の方は静岡へ。僕達が帰ったのは１０時。家へついたのが１０時半。

本当に祝福された式であった、日であった。けれども何と云ってもものたりないものがあった。やはり形式と云うくさみは已むを得ない。ことに近所がやかましかったのは遺憾である。ふくさとお菓子をいただいて帰る。

聖なる聖なる御家庭ならんことを。本当の基督者ホームならんことを。私達友人の切なるねがい。また確信ある祈り。本当によかった、と云うより外に感謝の仕方がないのでございます。えに本当によくあらんことを。

殆どすべての家庭が失敗へなるうちにも、とくに彼等をまもりたまえ。アーメン。

昨日、先生が言われた。「本を読んでいますか」と。私はこれを一生の警鐘としたい。怠け心のおきたときに、先生の「本を読んでいますか」をすぐ思いおこす様に。否、警鐘と云うよりむしろ愛の忠告である。アーメン。

１９２７年３月２９日（火）

午前、勉強。午後、更にやりたく、勃々として居るところへ義雄さん、隆さん来る。総評甲、優等生の証書。偉い。僕の如きじる次第である。散歩につれて行く。武蔵境へ行く。玉川鉄道に乗らんとしたところまだ１時間余も時間があると云うので、やむなく歩くこととする。とうとう井ノ頭まで３里弱の道を歩いた。彼等には気の毒であった。途中で写真をとってやった。成功していることを願う。井ノ頭で水をのむ。リンゴとチョコレイトをかってやる。中野までおくる。山本の姉、御病気、本当に心配になる。どうか軽くてすまんことを祈りまつる。

夜、三井さん来らる。相変わらずの元気。Optimist〔楽天家〕である。

「君などはまだ人生と云うものを考えたことがないでしょうな！」

飛んだ質問である。僕は言ってやった、

「もう徹底しすぎてしまいましたよ！」

眼をパチクリして居られた。曰く、

「それで丈夫になられたのでしょう」

と。とにかく、無邪気な人だ。変わりものだ。彼のこの調子ののみこめぬ人は、いやになって、おこってしまうだろう。と云うのは無邪気も甚だしく、自慢めいた鼻たかなことを平気で云われるからである。少々、変だ！と云いたくなる位。が、僕はいつも、よしよしと見ている。全く一面には徹底したところがあるからである。

要之〔これをようするに〕、問題の問題は、神をつかみしや否やに帰る。信仰ありやなしやに帰す。その外は起こってもよい。考えさせられてもよい。けれども結局ここに僕は帰らざるを得なくなった。げにかの女が歌えりし曰く。

「若き日ののぞみにみてる喜びは我を去れども我神を得し」

である。He in me, I in Him! Amen!〔彼我の中に、我彼の中に！　アーメン！〕である。これにまして大なることはない。

今は勉強！　勉強！　けれども一つ、母上の御健康のことを忘れてはならぬ。そのためにはこの勉強も犠牲にすべきである。僕はどうしても純然たる学者はだにはなれぬ。それにはあまりに僕は情に強い。情に動く人間である。人のためには手紙を書くことを惜しまぬ。人のためにはずいぶん僕は自ら善をなさんとするにあらずして、我が性の已むを得ずしからしむるの故になす。涙の人、情の人である。自らそんなことを書いてはおかしいかもしれないが、たしかにその程度がどれほどにせよ、之、事実である。そのために僕はまた幾度、悔い、失敗もしたろう。そのためにどんなになすべき勉強もせずして、本当の意味でまちがったことをしたであろう。すべての責任はただ、彼を仰ぐときに十字架が「よしよし」といって下さるので、なおも望を一つにして歩ませていただける。

１９２７年３月３０日（水）

曇。小さい連中がうるさくて、とうとう本１頁も読まず、お午を三人と共にする。姉上来らる。座骨神経痛に非ざる由。よかったと思う。願う全快の日の近からんことを。２時半、お暇乞する。３時すぎ帰宅。むしあつい。ギリシヤ語、ヘブライ語、忙しくて忙しくてたまらない。夜、先生に書いて、また出すのがいやになる。黙するにしかず、黙するにしかず。読書々々。

３月３０日の夜、これを記す。

「拝啓。３月２８日、博一兄と常子姉の佳き日を忘れることは永久に出来ないと存じます。変わり易きこの頃の天候にあの日がとくに一日中、快晴であったのもただの偶然とは存ぜられませんでした。

　それは所謂式と云う感よりも私には愛と云う感を深くらしました。先生のお室のあの力の溢れが人の業で出来ましょうか。本当に聖手によりてはじめよりおわりまでの厳粛なまた聖なる愛の日でございました。生命の満ちていた一日でありました。満腔の祝意は勿論、私はただ感謝と云うものにみたされました。

　夕方、自動車の中から富士を望んだとき、また金星を仰いだとき、私はそれが常子姉と博一兄の姿でないかと観ぜられまして、そのとき既に私も感謝なる晩餐に列している一人でありました。この愚鈍なる私は特に終りまで、と云うことを教えていただきまして有難うございました。

　ただあの佳日に小生の不行届なりしことは、何とも申訳ない次第でございます。かつて北京の兄が、小生が中学生になったときに、トム・ブラウンの話をしてくれて「雄々しく中学生らしくあれ」との旨を言ってくれましたが、これで大学生かと思ってに堪えぬ次第であります。１９１６年の４月７日の散歩と彼の語調を未だに憶えて居ながら、いつも失敗に失敗を重ねるのが自分でございます。彼が言動に言い難きものをふくんでいたのを今にいたって知ります。神様と人とに申訳けありませんと云って一生を終えるのが自分でございましょう。けれども主の十字架が「よしよし、もうそれでいいんだ」と仰ってくださるので、本当に十字架の蔭にしっかりすがりたくなるのでございます。それで一時は不行届に曇った小生の胸も、皆様ゆるして下さい。私はもう感謝で一杯でありますから、と云うのでございました。

　中山様が忘れものをされる由、何だかそそっかしいなどと言うよりも、この世のものに執着がないと云った方が、冗談でなくて本当に適切な評ではないかなどと心の中で思いました。

　中山様がなんでも小さな方であるとは、ごくながら、あの東京駅で（兄の出発の）お知りしたことでありました。それから今日まで、全く思わざるところへ、であります。私などはあの式に列せさせていただいてよい人だか否か、さっぱりわからず、ただお言に従うのみでありました。大変僣越な気持がしまして、はじめはムズムズする位でありました。御辞退しても悪いかと思って従いました。政美さんの代理だとか、つづきだとか言って笑って居られました。」

やっぱり書かない方がよい。僕はいつもこの愚をする。書きたくなって書く。書いてしまうと、どうしてもものたりなく寂しき感に打たれ、沈黙の雄弁なることを知り、金の替わりに銀を以て為そうとは思わない。ことに藤井先生などはなおさら、ダマッテ居る方をお好みだろう。僕もそうである。ただ日記の間にこれも挟むことにする。げに、星の光の如く輝きてもの言わざるにしかず。語らず云わず、その声きこえざるに。Amen! Amen!

１９２７年３月３１日（木）

在宅、やや勉強したり。３月は行く、４月は来る。

１９２７年４月１日（金）

ウソをついてもいい日だ、とは大きい兄さんが教えてくださったことだった。誰もやらぬ。僕、今日、山本で姉さんを一杯食わせてやればよかったに、とあとから思った。

またまた午前は、サンタチとすっかりフザケテすごしてしまう。また快なる哉。

お昼は姉さん洋食（オリヅメ）の御馳走になる。何でもなくてよかった。本当によかった。僕達も安心した。妊娠中のこととて一層気遣わしかった。

新宿へ行く。安田から５００円ひきだす。それをそっくり三菱へ預ける。三菱の立派さ加減には田舎者の様に眼をまるくせざるを得ず。しかし言うことがちがう、曰く「バビロンよ、バビロンよ、禍なる哉！」。銀座を歩き廻って居る中、虚栄のバビロンよと心の中で連呼した。中山さんへの贈物をさがしたが、３円、４円ではよい本なし。大抵、５、６、７円。已むを得ず帰る。ゴーデーの『新約研究』を自分のために買う。歩いて歩いてヘタバル。東京駅から乗る。車中、“Über Soklatis”〔ソクラテスについて〕を読む。３分の１読む。思った程難しからず。

銀座に限らず、近頃の東京の女の華美なことにおどろく。また流行をうる姿、髪の形などに驚く。それに相応しからんときそう男あり。ああ、かくて東京もまた再び震災に遭わざるべからざるか。天災も竟に人を変え得ざるか。悪しき人は竟に医やすすべなし。ただ、彼のいあるのみ。このことがわからなくて、何を以ておどしても結局、人は駄目。殆どいやになった。基督教と云えば全くあやまられているし、キリストと云うさえ僕にはいやである。いかにあやまられているか、ルッターが

「主の祈りが大なる殉教者である」

と云ったが、今は「キリスト」「キリスト教」すべて大なる殉教者、殉難者である。ああ、おそろしき世なる哉！　預言者はついに故郷に枕するところなし。

吉原の叔母様来らる。夜、ヨナ書復習、ギリシヤ語。

１９２７年４月２日（土）

午前、ろくろく出来ず。どうものろいのに悲観する。午後、午睡中、清水二郎君来たる。３時まで話し、午後５時まで井ノ頭散歩。夕飯。ハーモニカで讃美歌。

夜、ミルトン。すこし疲れて眠い。とにかくやっつける。明朝をまつ。清水君は静かな人だ。またしっかりした人だ。教会の中には珍しき人である。彼は僕の友である。僕などは及ばざること遠きものがある。しっかりしなければ駄目である。

１９２７年４月３日（日）

晴。朝、伊藤様の順子様、おば様、野中様、中江様を撮る。先生の立様、御病気。９度近き熱。子供であるから可愛そうである。子供室にはお母様の大きなお写真がかかっている。痛々しい感がして涙なきを得なかった。天的なものが併し心にしみるお子様方は本当に幸である。この幸は到底、世の考えではわからない。

天の辰雄は云う。今死んでもよいか。然り！　よい。こんな豊かなことはない。主エス様がいらっしゃる。アブラハム、ダビデ、イザヤ、エレミヤ、ダンテ、ルッター、ミルトン、バンヤン、クロムウェル、グラッドストーン、リビングストーン、ゴルドン、すべての聖徒（真の）。それから、藤井先生の奥様、高島のおば様、政美兄上、可愛い愛子、うみの父、皆居らる。こんなゆたかなことはない。武蔵野のクヌギ林もすべて美わしき地上のものにまして美わしき林も森も草も木も鳥も犬も天に居る。天国はかかる美わしきところである。天の辰雄は本当に早く聖国へ、と云っている。地の辰雄は云う、ヘブライ語をやったり、ギリシヤ語を、ミルトンを、ダンテを、ルッターを、アウグスチンを、カルビンを、シェイクスピアを、何のかのと色々研究したい、福音のために戦いたい、と云う。けれどもついに、信、望、愛のみは地にても天にてもかわらざるもの、永久のもの。げにこれをしも生命の生命として地の旅路を終え、天の旅を続けたくあります。アーメン。

ミルトン、今日は約２００行、大いにがんばった。帰って来て、出来ることはない。ただ休息のみ。聖日より聖日へ、ああ、何と云う幸であるか。天国はかかるよろこばしき働きにして安息の日。

１９２７年４月４日（月）

実様に書いているうち、泰ちゃんに対する祈り切なるものあり。ついに歌ならざる歌となりて出づ。

日はうつり、月はかわり、年は去り行くなり。

人はうまれ、人ははぐくまれ、人も亦ここをさるなり。

されど知る、人の生命のかげろうにあらざるを。

見よ、かの空とかの星を。そはのぞみのなり。

見よ、かのみえざる大いなるもの、そはたのみのなり。

知らずや、生命の泉、すべてのすべて、そはこの世の愛にあらざるを。

「君の人格には或る意味に於てイエスの香があった。

ガリラヤ湖又は橄欖山の如き背景に適わしきものであった」

藤井先生のこのお言を何と思う。僕に敢えて言わせていただく。本当に兄は、兄の愛は、兄の動きは、この世的ではなかったと。凡そ僕のきいたあるゆる讃辞の中で、かくの如きものを未だかつて一度も、である。総理大臣のなんのと云う肩書の到底及ばざる讃辞である。僕には到底彼の純にまでとは望まれないが、けれどもけれども、みこころならば彼の純にまで、と祈りまつる。ああ、砕かれたる謙遜なるpure〔純粋〕なる魂にしてくださいと祈らんのみ。アーメン。

１９２７年４月５日（火）

晴に非ず、雨、但し夕より晴れる。兄の如く黙せんかな。身を以てする伝道に如かず。信仰、これは僕にしても一朝にして得られなかった。それは実に奇しくあった。その如く、人々も奇しくあるべきこと。僕が手紙でどんなに書いても駄目。もうやめる。武田の叔母様にさえやめる。然せんのみ。ただ身を以て。兄の信を以てしてもついに僕一人と母上のみ。母上はまた失明の特別なことがあった。それよりすると僕一人か。かくも信仰は、

「我あわれまんとするものをあわれむ」

ところよりいただくのみ。世の人を嘆ずるはあまりに愚けしきことでもある。けれどもたしかな一事は、

「神は世を愛し給えり、その独子を下したまえり、世は贖われてあり」

と云うことである。受けざるは人の盲。帰らざる子を見る天国の父のなげき。かくもあわれなる世の人。我もまた罪の子。けれどもこの一事を見せしめられたる我々は何にもかえられぬ恩恵に浴したのである。死も病もこの恩恵より離すことあたわず。アーメン。

小川くにと云う母上の御友達、今日帰省さる。西荻窪駅で安井先生におあいする。げに一日をあまりなすことなし。久しぶりで仁丹を３粒口にする。お腹が丈夫なことは全活動に大なることであって、お腹がわるくて能力のあがらぬ昔を思いだして、よき意味の今昔の感にたえぬものあり。

我、えらばれたりと自ら思うにあらず、我はただなすべき分をなして、この世を去りたきのみ。すべての野心は我を動かす能わず。野心とは何ぞ、曰く、

「父なる神に従い、主を仰ぎて歩まんこと」

これのみ。

１９２７年４月６日（水）

晴にあらず雨。あまり読書せず、箴言を通読す。ギリシヤ語難しい。

１９２７年４月７日（木）

晴。母より聴く。父の死せしとき、借金だらけ。すべて無一物になるの思いで母上は返却す。げにその時、無一物となれり。父は月末によく金を返しもせずして贅沢をせりと。げに金は貴むべきものである。かかる借金のことの故に。

金銭上のことに於て人に負う程、辛く、醜く、言い難きいやなことはない。このことは勿論、基督者たる自分は覚悟せねばならぬ。飢ゆるとも人より金を借りることはならぬ。むしろ、死せんのみ。正より正へ、義より義へと踏むことのみが人生である。借金をして生くるは、それ死するよりも駄目なことである。母曰く、父死せしとき、これから本当に正義のらざる生活──∵父はなきに贅沢をして借金をつみしかば──に入れると（知られざる）神に感謝せりと。げに偉なるかな我が母よ。しかしてその年の夏、青木、吉原、武田の叔母、田沢温泉に行きお国の五明の叔母様と相会し、母に書き送りて曰く、

「皆あつまりたれば来りて暫し休養せられよ」

と。されど我が母答えて曰く、

「我に五人の子女あり。我が働きはこれよりなり。この重大な第一歩をあやまるべからず。我このホソ腕にてこの五人を養うべきを、今その休養にあずかるとは我が心ならず」

との旨。叔母共、この旨を読みて涙下りぬとぞ。げにこの正とこの義とこの真の愛ありて我等は育てられたるなり。感謝しても余りあることなり。政美兄上の卒業後一年にして、武田、青木、吉原への借金は、返却されたり。しかしてこの今日、母の生涯にて最もゆたかなるときなりと。いかなることぞや。金の出来たる故に神に感謝するにあらざれど。

げに詩篇３７篇２５節、

「われむかし年わかくして今おいたれど のすてられ或はそののこひありくを見しことなし」（詩篇37･25）

神、義者を守り給うなり。

政美兄上を小僧にやっては、と母にすすむる人あり。されど母上は勿論、させる〔然せる〕を容れず。そろばんの上ではあわざること勿論なれど、やって行けぬことなし。しき道をふんでそれが切り抜けぬことなしと信じて歩みきと。げに偉なる哉、我が母上。

かくて兄はその道を全うせり。その倹約、その緊張は知る人ぞ知る。サケの塩焼きすら贅沢なりとなせり。にまめを特別にておベントーに入れるさえ贅沢なりとせり。今の足りすぎたるを思う。人は塩をなめている間が幸なりと思う。甘きを味わう様になりては危きかな危きかな。

また、政美兄上死せりとき、我を高校へすすめざりし人は誰なるか。我これを書くを欲せず。されど勿論、母上は我を学校へとのぞまれたりき。かくて我が今日もありたるなり。また自分としてもあのときすでにその声ありしを知り、「何をコシャクな！」と心の中に憤りたるなり。我をして第二回目に一高を受けざらしめたるすべての親戚の声は如何。ただ一人実様のみ反対なるものの如かりしも、我が願うところは一高にてありき。しかしておそらく一高に入れしならん。∵水高へは優秀な成績で入りたる旨、生沼先生より電話ありしと聞けば。げにあれほど自信のあったこともなかった。中学へ入ったときは本当にうれしかった。それは心配の度がつよかったから。けれども水高へ入ったときに、中学で４年から５年へのぼると少しも変わりなく当然なりと思う位であった。あれが一高であったら嬉しかったろう。

けれども、かく云いて過去にグチを云うのでない。水戸は水戸の故に私にそれは重大な重大なものであった。水戸のあの４年ありたればこそのこの日である。若し一高だったら、もしあの病気もなかったら、どうであったか。返ってあやぶまれるものがある。水戸、それから帝大の文科。奇しぎなる知らざりし道へ、私は導かれ行くなり。

げに、信仰に入りてはじめて、神のなしたもうことのどんなことであるかが段々わかって行く。かくしてある今日、

母上の奮闘、堅忍、真愛を思いて、

政美兄上の指導、その血を思いて、

龍二兄上の恩を思いて容恕を思いて、

我、厳として立たざるを得ず。

我が任のにあるかを知らず、

されど我は義に立ちて終生せざるべからざる一人なり。

我、何かなさんとは欲せず、野心なし。

我、されど如何に歩まんかについては心するところあり。

如何に何を求めて歩まんか。

そのことは我が日夜の祈りなり。

げに神様よ、救い給え、助け給え、力を注ぎたまえ。

我はこの世の子等と共に歩むこと能わず、

我が道はの道なり、険しき山路なり。

我が行手は大海、たる荒海なり。

されど知る、我を導くたしかな聖手のあるを。

わがよりどころ、我が綱よ、

わが光よ、わが助けよ、ねがわくは

汝にのみよりて、この一生を貫かさしめ給え。

わが霊魂よ、黙してただ神をまて、わが望は神より出づ。アーメン。

汝の外に我たれをか天に有たん、

地には汝の外にわが慕うものなし。アーメン。

４月７日のつづき、夕、書く。

中学入学当日を思う。桜が咲いていた。新入中学生が帽子も服も新装で嬉々としている。全く１０年余の昔を思わせられた。中学入学は実に大正５年〔１９１６年〕。１０年に余るとは自分も驚く。変わったことは何だろう。昔の純真な心地はあるか。あの子供らしさはないかも知れぬが、主を知りまつりたるの故に、永久の子供であり得てまた昔も近い哉。有難き人生なり。

山本訪問、姉さん未だ思わしからず。お気の毒に思う。三人は元気。神様、どうか、小さい人々をおあれみ下さい。新宿へ行く。新宿もまたバビロンなる哉。なまいきな女学生がカッフェーに入って行く。現代女子の堕落は著しくある。彼等の読むものはクダラヌ月刊雑誌である。雑誌はかかる女学生を相手に益々堕落したものとなる。禍なるかな、日本の亡び行くは女子の堕落からであるかも知れぬ。悪主婦が出来て何で子供がよくあり得ようか。ああ、おそるべきことである。日本も遠からず欧米の跡をふむだろう。とき至らば、されど日本にもルッターを下し給うであろう。いやしくもこの大和魂、武士道の国が全く亡ぶることはないと信ずる。日本の将来はげにノルかソルかである。時に英雄は必ず出づるであろう。

雨と私。

雨しきりなり。我が意中を言うに似たり。

我、政美兄上を偲ぶとき涙なきを得ず。

我、母上を思うとき涙なきを得ず。

我が霊魂の救われんために兄は去りたり。

我が今日まで育てられしは母上のにあるなり。

而して我が母上は過労によりて失明の賜を得たり。

これを思いて泣かざるは弟にあるざるなり、子にあらざるなり。

ああ、我が雨よ、汝は我が最も親しき友なり。

我、自分を思うとき、我が罪を思うとき、

すべて汝は我が親しき友なり。

地上の人生はげに悲劇なり。

されど一つのことあり、曰く、

　　復活！

この復活なくして我は自殺、家たらざるを得ず。

厭世せざればこれ自らをゴマカスモノなり、いつわるものなり。

　　空の空なる哉！は一度、我が声なり。

されど見よ、基督の復活。朝は近し。

げに、夜は夜もすがら泣き悲しむとも、朝にはよろこび歌わん。

人生は大喜劇の序曲なる小悲劇なり。

されどこの悲劇なくしてこの喜劇はわからず。

この喜劇を信じ得ずしてこの悲劇はわからざるなり。

「ああ、エルサレムよ、エルサレムよ、いつまで！」

ああ、わが親しき親戚の人々よ、いつまで！

吉原、青木、武田の皆様よ、いつまで、そうやっておいでですか。

私は本当にかなしくあります。いつか「げにおそかりき」と言うときが来ないでしょうか。でも私は死の際の最後の３分間でもあなた方に真の光ののぞまんことをまちます、望みます、祈ります。地上に於てついに光がおわかりにならないならば、それは私の第二のなげきであります。今のなげきにもましてそれはつらくあります。けれども、永く永く耐え忍び給う父なる神様は、来ん世にてあなた方をいつか本当に光に導き給いましょう。

この悲劇の人生に、涙の谷に既に喜びの泉あり。これ来ん世の前味にしてたしかな徴なり。このことなくして永久の世も信ぜられざるべし。この一事ある故に信じられて余りあるなり。涙のみならば人いかで喜びを知り得んや。誠に、

「今見るところ、感ずるところ、聞くところ、おぼろなれども、かの時には彼の我を知る如く、我も彼を知らん。」

アーメン。

１９２７年４月８日（金）

昨夜もまた眠られぬ夜の一つであった。１時頃であったろう、眠りにおちたのは。されど今朝の朝日を見よ。いかに輝きてありしよ。いかに喜ばしき朝なるよ。

お孝さん病気で姉上内外忙し。我が助手はいたって。女の身にあらざればどうも致し方なし。出来るだけは為さんのみ。

１９２７年４月９日（土）

午前、ギリシヤ語。午後、銀座、学校、本（ミルトン）を買う。ギリシヤ語文法書。夜、ミルトン、１時になる。

１９２７年４月１０日（日）

朝起きて、ミルトン。２００行、昨夜からとで。ややねむし。９時４０分、伊藤さんへ行く。佐藤君まだ。驚く、胸いたむ。写真を皆様にあげる。印度人だの、台湾の土人だの、何だの皆様で笑って居られた。しかし、はっきりとれてよかった。午後、ミルトンのみ、６時頃になる。帰る。感想多々あれど書くに疲る。

１９２７年４月１１日（月）

終日曇或は雨。午前と昨夜で佐藤君へ１２枚と、野中様へ３枚の書翰。書翰に疲れる。午後、ギリシヤ語、ヘブライ語、疲れた。母上に『旧約と新約』第２号全部を一気呵成によむ。ちゃんも針を途中で止める。僕の声はときどきつまった。「悲哀の人イエス」である。アーメン。つかれた。ねるのみ。（すべて９日、１０日、１１日を１１日夜９時半一寸かく）

『基督信徒のなぐさめ』第１講を再読して新たなる涙を覚えた。My brother in Him!〔わが兄上は彼の中に！〕。母上今いまさずとせば、と思い、これまた深き思いに打たる。母上、失明なり。その労働を思い見よ！との声の下に僕が頭はあがらざるなり。おお、悲哀、悲劇にかこまるる我は、冥想せざるを得ず。我が受くべき杯もまた定まれるが如く。曰く、「苦杯」、主よ聖旨ならば、我とりさらるることを願うを得ず。そは我が兄、我がために。我が母、我がためにの故に。アーメン。悲惨の道は涙の谷に、我への道、泉を湧かしめ給う主よ。

１９２７年４月１２日（火）

午前、青木へ。三弦さん水戸引揚げ、家中お掃除的有様、病者泰ちゃんあり。手伝う。登校、授業なし。午後３時、再び来る。ついに着荷せず。６時少し前、帰る。泰ちゃんには同情するのみ。ただ彼が心の光をみんことをのみ祈る。実様は青木の唯一の人物。学才は皆あり、されど人格者は彼のみ。四郎君は信念なし、弱し、所謂貴公子はだなり。白山上でお茶とコーヒーの御馳走になる。夜なすことなし。

１９２７年４月１３日（水）

昨日も今日も快晴。ねがうところは在宅して読書し、散策するにありしこと勿論。されど、ある細き声の命に従いて再び青木へ行く。午前、神田、銀座、本屋をまわる。デューラーの絵葉書、“St.Michaels Kampf mit dem Drachen”〔聖ミカエルのドラゴンとの戦〕、“Christus vor Pilatus”〔ピラトの前のキリスト〕。前者は佐藤勲君におくるべく。病床を慰むべく、励ますべく。教文館へ行く、書類会社へ行く。J.Skinner : Religion of Prophety (Jeremiah)〔スキナー著：預言者（エレミヤ）の宗教〕を買う、８円１０銭。政美と辰雄よりの中山博一様へ御新婚の御祝いに、「永く佳き日を憶ゆべく」としてあげるために。新本に拘らずやや汚れているので残念千万である。書類会社のオヤジ、まけようとも云わぬ。まさか贈りものをネギロウとは思わなかったが、彼の気のキカヌ商売ぶりがソッケナカッタ。愛なき暖かき心なきオヤジである。

兄上の日記から「政美」を切りぬいて貼りつけた。歩きつかれてお昼に５０銭のウナドンをとる。贅沢とは思いつつ。２時から６時まで青木で荷物ときと運びの筋肉労働をやった。おかげで晩餐は美味しかった。なるほど労働者はよく食べよく眠り、よく太れるはずと思った。これげに筋肉労働者への幸なる賜である。８時お暇ごいする。９時半帰宅。１時まで眠れず。何故。あることの故。２日を勉強には棒にふる。されどよきものその中にありき。まことに人生は学ぶことにあらで歩むことなり。学ぶことの中に勿論歩むことはあるが、ここに言う学ぶは独義に於て。

１９２７年４月１４日（木）

終日雨。石原さんへお使い。学校へ行く。Swift先生lame-man〔足の不自由者〕になられ、誠に御老体のところお気の毒に思った。かくしても勤勉に来らるる先生には敬服せざるを得ぬ。出席者、全体の５分の１にも足らず。なまけると云うより今日はすまぬと云う感じがする。Paraphrasing〔意訳〕の練習。木原にチョットよる。塚本先生のお払本いいのなし。やめる。苦笑した。斎藤様へちょっとよる。帰る。母上に大分読んであげる。雨はふるふる。学校ははじまる。さて、忍びて戦わん哉！

１９２７年４月１５日（金）

雨、ひねもす雨。ファウストあり。研究室で読書すこし。Metrik〔韻律論〕は厄介らしい。帰りの電車の中の眠かったことったらない。夢さえ見た様である。夜、斬髪を兄に。大学入学以来一回も外のトコヤへ行かず、一分刈りのボーズ頭は独文に３、４人のみ。

１９２７年４月１６日（土）

あまり勉強せず。

１９２７年４月１７日（日）

快晴。はやく新町へ行き、佐藤君を訪う。やや蒼白の顔。それでもよかった。散歩する。丘陵の草と雑木の中に藤井先生が独りで坐って居られるのに会う。二人でおどろく。先生は曰われた、

「ここは独りで居るのにいいところである」

と。先生の心は正に之である。

「イエスは山に、

　人々は家路に。」──ヨハネ伝

ああ、先生の如き実にイエスの僕として最もふさわしき御一人である。柏木の士にはこのType〔タイプ〕の人々が居る。内村先生が勿論この一人である。けれども何だか藤井先生には一つの言われぬものがある。それがイエスの基督教なんである。

水際に行って二人で祈る。長きよき祈りをしてくれた。かんたんに僕はつけくわえた。

コーヘレス第７回位、第６章、７章６節まで。

「名はにり る日はるる日に愈る」（伝道の書7･1）

アーメン。午後、ヘブライ語３章、５時半になる。ミルトンは出来ず。野中様いよいよ海軍士官（中尉）である。立派なものである。風采堂々たり。キンピカの短剣にはおもちゃと云う感じがした。お昼はいつも井浪君と一緒に御馳走になる。帰って、母上に泰ちゃんの話をきく。彼曰く、

「宗教のかげにかくれて平安を得るは卑怯なり」

と。もし宗教（キリスト教）が人間のつくったものなら、それはたしかにそうであろう。ゴマカシであろう。卑怯であろう。然るに、キリストはそんなものでないことはあまりに明白である。彼の心こそあわれむべき呪われたるものであって、我、言わざるを得ず、祈らざるを得ず。

神様、彼は言うべきところを知らないものであります。あわれむべきそのかたくなな心を砕き給いて、真の砕けたる魂にたちかえらせしめ給え。いつまでも僕は待たねばなりません。アーメン。

おお、十数通なる僕の書信にも、彼には答えるに「宗教はゴマカシなり」としか言うを得ざりしか。もとより我、彼の立ちかえり得ることを殆どのぞみあたわざりしなれば、この言は私に於てつらくはない。けれども、かかる魂の如何に多きかを彼に一例として示されて悲しまざるを得ない。誰が人を救い得るか。我等はただ本当の意味に於て祈ることよりほかに出来ないのである。俟つよりほかに途がないのである。

僕は世がきらいである。それにも拘らず、世を愛せざるを得ざらしむる力あり。そはげに、彼の十字架より来る。クリスチャンの人に対する涙とはこれである。若し彼の十字架がなかったならば、クリスチャンは皆、武器をとって戦うてたおれるか、山にかくれてしまうかのどっちかである。

このことをきいて心いたみ、僕はついに〇〇紙３枚１２頁、１時まで一気に（書きはじめたのは１１時半かその辺だったろう）全くいきをもつかざるほど一気呵成に書いてしまった。書いてのこるはやはり言いがたき嘆き、祈りのみ。さてこれを武田叔母、青木叔母、母上のお三人に読んでいただくか否か問題である。ことに青木の叔母にはあまりきかせたくないからである。

１９２７年４月１８日（月）

快晴。ヘブライ語を勉強すべかりしに、書翰を書いたために、今日は少ししか出来ず、残念千万であった。が、仕方がなかった。仏文の岡田三郎と云う人と僕だけ２時間。石橋先生を占領する。帰りにのぶちゃんのところへ行き、１時間半話す。主に旅行（紀伊への）の話をきかされる。いい旅行であったらしい。しかし僕のする様な旅行（したことはないと云ってよいが）とはおもむきがちがう様であった。

神様、光の子がこの世の子にまけるわけはないと存じます。どうかしっかり勉強させて下さい。アーメン。

１９２７年４月１９日（火）

信仰生活の難路。義にして愛なるものの姿は屡々、暗雲にかくれる。このまがれる不従順の世にあってこのことあるは当然なり。されば気落ちする勿れ。

人々は家路につくであろう。されどイエスは山に行き給うたのである。

今日も我、淋しく悲しくなりて、山ではないが、立教女学校への道にある林の真中にねころんで天を仰ぎ伏して祈る。ああ、罪のくさりにつながれたこの身。このくさりをたつべき火は彼の愛のみ。アーメン。

〇〇〇〇とか何とかすべてのことを人をして云わしめよ。我は生けるものにすがってのみ生くるを得ることを知るのみ。武田、青木、両叔母来られた由。

親戚のすべて、我が母、兄さえも。すべての学校の師、友。ああ、我何の関わりあらんや。ある意味に於て僕はあきらかにかく云いて世を捨てる。

けれども、十字架のみは捨てることが出来ぬ。これを負うべく生まれたのである。かの十字架のみは仰がざるを得ず。これを仰ぐべく生まれたのである。そしてついに復活の基督を仰ぎ見て、我が身も心もおどりて、主来らんことを俟つ。みこころなさせ給え。この身はいかにもただみこころのままなし給え。アーメン。

ヘブライ語Analitical Lexicon〔分析的辞書〕を買う。井浪君にあう。

１９２７年４月２０日（水）

烈風、吹きすさびて終日心地よからざる日。室もチリクサクなる。お茶の水あたりの塵芥、言語に絶するものあり。東京はたまらぬ。はたけのゴミはまだたちがよい。

春眠曙を覚えず、とはよく言いたるもの。いつもいつもねむい。神経衰弱とは何ぞや、と云いたい位。

１９２７年４月２１日（木）

烈風、後、夜になってようやくなぐ。やく２日にわたる風にはあきれる。凡そ善なるもの、美なるもの、真なるものをとり入れて以て我がものとし、凡そ悪なるもの、醜なるものを見て以て誡めとなすべきである。すべてのGrund〔基礎〕を信仰に置いて眼鋭く、パキパキとやっつけて行きたくある。あとウンウン勉強。益々この身、小さなりといえども使命の重大なるを感ず。げにこれからの日本の使命は大である。このときに際会して酔生夢死せんか、日本青年の恥辱たるや大なり。

ああ、重大なるこの時、我が眼光は、我が眼氷の如く冴え、我が心、火の如く燃えざるべからず。信仰、パウロよりヨハネへ。最後の花冠へ。しかして終末のとき。ああ、主よ、来り給え。十字架をされど忘れて何ものも出来ぬ。

さて、第２学年もまた忙しき哉。はげまん哉、はげまん哉。ルッター、ミルトン、オーガスチン、ダンテ、シェイクスピア、ゲーテ、シラー、ヘルデル、レッシング、クロップシュトック、テニスン、ローエル、トルストイ、ドストエフスキー、読みたいものは限りなくある。すべからく第一流のもの、古典のもののみをしっかりと。

天の兄上政美よ、願わくは天にて祈れ。辰雄は、上ったり下ったりします。どうかいつも主をたたえることを忘れずに、自らの効や智に鼻が高くなっては大変であります故に、どこまでも真にスピリチュアル〔霊的〕に、真に愛に、人生を歩むことを最大のこととして。とき至らばこの身を神の祭壇の前に血けむりと散らしめ給え。アーメン。

１９２７年４月２２日（金）

曇。ファウストなし。ブリーフェと沢村さんだけ。神田へ行く。本を２、３冊と、デューラーのPassion〔受難〕を３、４枚買う。彼の画は全くだれかが言った様に、力強く深刻である。そのハッキリした画き方は正に独乙魂のSymbol〔象徴〕である。神田を歩いているうちにいつしか日が暮れそうになる。大きな荷物をかかえて帰る。車中、K.Sell : Die Religion unserer Klassiker〔ゼル著：我等の古典的大詩人の宗教〕を４、５頁読む。おもしろい。ねむくなり、９時は就床。

１９２７年４月２３日（土）

花曇。信仰の試練、大学と自分、学問と自分、宗教と自分、誘惑と自分。このときにあたりて、シッカリ目を開いて行かねば全く一生駄目となる。この時にあたって勉強せずば──無理もかまわぬ──駄目である。この時にあたって、しっかり信仰の歩みをドシンドシンとやって行かねば、人に蹴ちらかされる。げに戦の時、戦の時である。善き戦を戦わずんばあるべからず。……〔独文省略〕……。

兄上、８日間の高崎方面の演習を終えて帰らる。今朝夜半の零時に出発して午後４時に東京へ帰着。その強行軍には全く驚く。人もうまもこの難行。かくの如き話を聴かされては全くつとめざるべけんやである。然り！　我に於ては信頼の外、道なし。

母上の身体、衰弱の極に近くある。憂えざるを得ず。或はあまり遠くないかも知れぬ。

「あっちへ行けば、政美と愛子と三郎。ここには龍二と富士子と辰雄」

どっちでもよい、と。かくの如き言葉はたとえ冗談にしろ、きくにつらくある。母若し召されなば如何に。我は孤児である。けれども幸に最早大学生である。うろたえ、人に侮られ踏みにじられる様なことはない。

母上かるべきとき至らば、我は奮然として立つであろう。親戚のすべては何ものぞ。我は独立せん。どんなことがあっても、金銭上の厄介にはなりたくない。これを思って最早油断の秋ではない。しっかりせねばならぬ。金の上で人に負うほど辛きことはあるまい。

母も父も、兄も妹も、とらばとりね。妻もなくばなくてよし。我に信頼の磐あり。我に最大最愛のものあり。彼なくして我はないのである。

佐藤勲君来る。夜までは居ぬ。夕、共に散歩して帰る。倉島久子さん来らる。すでにBraut〔花嫁〕である。加賀町の家に見えたときは女学校の３年だったのだが、小さい位にしか思っていなかったのに、こっちが大学の２年生なんて云っているうちにはやBrautとは驚く。人も吾も世もうつる。ああ、空の空なる哉。それにつけても、しっかりしたものをつかんで、のぞんで歩みたき人生である。彼女の上に平安あらんことを。関久子さんとなりたる彼女を思ったときに言いがたき思いもした。

今日、母に伴われて来た彼女、その若々しき美わしき姿。それが僕の彼女との会見の最後であるかも知れぬ。宮崎県へ行く由。法学士の由。今日の一（文字通り）がそもそも終りであるか。ああ！とは本当に出る嘆息である。何も失恋の故でない。何も思いを彼女にかけた故でない。とにかく少しは共にすごしたことの故にかくも淡く人は来り、人は去るものであるかとの故の嘆息である。再び、彼女の上に平安を祈りて、今晩はねる。

昨夜、ハッキリ兄上のすがたあらわる。夢の中にあらわるることこれで何度か。恐らく一生涯かくあるであろう。政美兄上は信仰で、龍二兄上は武士道で、この両兄をもてる自分は飽くまで更に何んことをのぞむ。

僕としてはこの母上と、この兄上とこの兄上とこの姉上ありて、全くありあまる恩寵である。これ末の子の特権である。この末の子はどこまでも末の子らしく全うしたくある。

１９２７年４月２４日（日）

聖日。朝、新町、伊藤さんへ。野中、中江の両兄、佐藤君と４人で散歩。友の祈りを！と云う切々なる野中さんの声を聞く。祈りはとくに力あった。午後、ミルトン、ヘブライ語。８時にんとするまで、夕飯も忘れてヘブライ語の研究。１０時近く夕飯。ただただ感謝と深き思いの聖日である。ただ安息日に頭をつかいすぎることはお互いにどうかしたいものと思う。

先生は相変わらず、天と来世の方であって、伝道に熱心でないと自ら言われる御心も想像される。実はそこに言い難き厚き厚き祈りが人々の上にあるのでないだろうか。先生と人とはあまりに離れている。それほど先生の祈りは神への絶対信頼、十字架のみ、なのである。

１９２７年４月２５日（月）

兄上、激務の疲労で発熱。誠にお気の毒と思う。使いに夜出かける。佐藤君に返事をかく。甘い汁をすっているのは自分ではないか。深くこのことを思うと自分は眠れなくなる。兄上の死、母上の失明、次兄上の働きを思うとき。けれども、謙遜の最大なるものは自らもまた十字架を負うことである。

車中、乙女の小さき姿の人々のスシズメの中に折られんばかりなるを見て同情にたえず。困った世の中である。

少年マンマを見て、涙そぞろに流れんとす。母上を思う。ついに人生は涙の谷である。ついにTragödie〔悲劇〕である。されどああ、偉大なるKomödie〔喜劇〕の前のTragödieなのである。この故にのみ我は生き得る。

神いまさずば、来世なくば、我はいくるによしなきなり。アーメン。

ギリシヤ語はじまる。進むこと大である。ヘブライ語、創世記２章読み終る。今日は先生一人、生徒一人、生まれてこんな時間ははじめて。独乙語はウントやらねば。忙しいことしい。ナマケモノはどんなにでもベンキョウするがよい。学びすぎて死ぬなら学生の本望である、と云う気も一寸ないでもない。勿論これは意気であって、信仰の言ではない。人によって、なしあたわざることなし。

１９２７年４月２６日（火）

天のお父様、つかむべきをしっかりつかんで歩ませて下さい。私はとかく雲をつかむが如きことをすべてになす男であります。どうかしっかり一時に一事をして、しっかりとたしかな歩みをさせて下さい。そこにのみ真の生命あると思います。天の大きな大きな希望を抱いて、のぞんで、そして而も空漠にあらず、しっかりとつかんで血とし肉としてあなたの大きな聖旨へ一歩一歩とその歩を進ましめて下さい。地上の生涯果てなば、天上にて更に更にしっかりと。

知識慾は本当にあなたを畏れるの基の上になさしめて下さい。決してこの世のことのためにそれを目的とすることなからしめて下さい。十字架を知ることの最大をいつまでも忘れることなく、ますます深く、ますます強く知らしめて下さい。主により、アーメン。

今日、小さい女の子が本郷区役所停留場のそばで左足（趾のところを）ひかれた。悲鳴をあげた。然るに車をひくものはすぎ行かんとする。ああ、その心理。また彼女、もしそのためにビッコになるなら、本当に可愛そうだ。人生はこんな悲事にみちている。それをともかく思うことなく忘れて、偽りと虚栄にすごす男女の多くは何たることであるか。僕はあの混雑する新宿駅で思った。その着飾った変なひとみ（瞳子）、禍なる哉、現代の女、男も。ことにくだらぬ雑誌を手にする彼女等が全くなさけなくある。雑誌の売れ行きを以てもわかる。将来の文明、文化の使命は東洋に在りと、ことに日本にありと。しかるにこの現状、はたしてしかるか。多くの疑いを容れざるを得ず。とにかく、福音がたおれる時はない。さればこそ、我が立つべきはこの磐の上である。この磐の上に真の日本は建てらるべきである。

１９２７年４月２７日（水）

朝、快晴の朝。我が心、復活の喜び。母上に、「快晴のお天気ですよ」。母、「そうかい！」と言って笑顔、嬉しげに。若し母にして見得るならば、共に倶にこの朝の景、新緑の萌え出ずる若々しさを見て、復活の喜びを共にし主を讃美すべきに。ああ、母の眼はとざされてあり。何たることぞ。人生の、母の犠牲の生涯。我が顔、我が眼、曇らざるを得ず。人生はげに血また血である。このWirklichkeit〔現実〕を如何ともするあたわず。我もまた十字架へ！　大なる悲哀と大なる希望の喜びの両極の間を。しかも中間ではなく、げに不思議な道ぞ。然り！　悲哀の道の中の喜び。これほど深刻な悲哀と喜びとがあるか。悲劇のあとの喜劇。地上のあとの天上。

１９２７年４月２８日（木）

事毎にこの世の子等と我が道との異なることを示される。しかのみならず、クリスチャンと云うものの中にも。四面楚歌の声とはこのことである。禍なる哉！と千万辺となえても間に合わぬ。時々思う。ああ来りて、我も人々も、もっとともに震い給え。大天災を下したまえ。世界のりよ来れと。げにこの悪の世を改めんとするにまさりて不可能なことは無いんである。その不可能事を知りつつ、しかもなさざるを得ざるは真の伝道である。伝道とは決して説教のことでない。無言の中に、日常の生活の中にある。

宣ちゃんは煙草を吸い出した。髪を分けだした。何もとがめようとは思わぬ。ただ、心のねがわくは、浮かざらんことを。しかもこれは殆どのぞまれぬチューモンではないか。その手振りはかなり社交的である。然り！　我々内村先生の弟子等ほど、否、真に基督の僕とならんとのみしているものほど、世の中にあわれなものはない。これほど誤られているものはない。しかも神の前にはこれほどたしかな勝利の栄光の道はない。

世に、肉の眼に、物質的に、irdisch〔この世的〕にあわれなものにならんか。

世に、肉の眼に、物質的に、irdischに栄えんものにならんか。

道は何れか一つ。両者共にはならず、中間は駄目。これか、あれか！　Entweder-order!しかして、我が道は前者ならざるを得ず。主よ、終りまでえしのばしめてください。

１９２７年４月２９日（金）

天長節。政美の如き辰雄に、と祈る。

宮脇の印刷の葉書に答えて。……〔独文省略〕……。宮脇は言う、

「自己の微力と不完全さを思わざるを得ません」

と。彼の真剣と深刻は未だたりない。何故まだ自己を生かしているんであるか。僕は、

“Mit unserer Macht ist nichts getan!”　──Luther

〔「我等の力をもってしては何もなされない！」　──ルッター〕

を書こうと思ったが、まあまあと思って、ヒルティー先生から借りて来て、しかもそれさえ、Gott〔神〕のかわりにWahrheit〔真理〕を以てしたこと、いつかの様に。

“Der Freiheit Preis, es ist der Freiheit Tod;

Zur Knechte Wahrheit muß du dich ergeben.”

〔自由の価値とは自由の死である：真理の僕へあなたは身を捧げねばならない〕

併しこの二行がわかってくれれば、宮脇に対する我が友情は尽くされ報われて余りあるのであるが。人間の弱きはついにその無を思うに至らざるべからず。

１９２７年４月３０日（土）

風。

「ああ神よねがはくはなんぢのによりて我をあはれみ なんぢののおほきによりてわがもろもろのをけしたまへ」（詩篇51･1）

ああ、神よ、詩篇５１篇なりや。アーメン。

午前、やや勉強。午後、午睡。風吹き出す。庭イジリの手伝い。隣の佐藤さんも一心。芝をあげる。女の子二人で水撒きをしていた。一番上の娘は慶応の学生のところへ行った。二番目のも女学校を出て、今万事母の手伝いをしている。皆イヤミのない人達である。男の子は今年成蹊の７年校へ入った。英語をやりはじめた。昔を思う。同心町の昔を思う。とにかくあの過去の再びかえらざるを思うと、やはり悲しい様な慕わしい様な気もする。

本当に人生は悲劇である。けれども若し、一つの希望がないならば、全く僕などは自殺か出家もしかねまい。けれども一つの確かな希望の故に、過去の慕わしさも更に更に生かされて将来にある、げに大なる希望である、これありてこそ、来るべき世ありてこそ、この世が意義ある、悲しさに終らぬ。これは全く僕の全人生観である。これをくつがえされては、神本位、来世本位をくつがえされては、僕に生くるすべが全くない。

おお、たのしげに水を撒き、草をでる乙女等よ。いましらもやがて互いに別れを告げるときが来る。我は祈る。そのときに本当の希望を以てを別つを得ん力の与えられてあらんことを。彼等を見て愛らしきとは思えども、げにこの涙の故に、我ただ愛らしいといって、この世の人の如きあわき恋に笑うことあたわず。我が眼底の涙の泉いずれのときかれ果てん。

政美兄上がさきに行かれたと云うこの一事。この一事が僕の人生を創った。神の聖旨の何処にあるかは永久に、否、彼来り給う日までわかるまい。